

平成19年度障害保健福祉推進事業報告書

子どもの発達支援のための コミュニティ機能強化事業

[テーマ]

1. 高校での発達障害が疑われる高校生への支援の現状と地域支援の構築
2. 三歳健診時における自己記入式の養育者ストレスチェックシートの試作と検討

北 海 道

高校での発達障害が疑われる高校生への支援の現状と地域支援の構築

<目次>

はじめに

01. 調査目的
02. 調査方法
03. 調査結果
 - (ア) 調査日程・概要
 - (イ) 面接調査結果
 - (ウ) 調査シート作成の結果
04. 考察
 - (ア) 生徒の発達について
 - (イ) 生徒の家庭環境について
 - (ウ) 生徒の学習状況について
 - (エ) 生徒の学校生活について
 - (オ) 生徒の進学・就労状況について
 - (カ) 教員の労働状況，およびメンタルヘルスについて
05. 提言
 - (ア) 発達・家庭環境支援のための学外連携ネットワークの構築
 - (イ) 進学・就労のための地域ネットワークの構築
 - (ウ) 教員のサポートのために必要となる人員及び教員のメンタルヘルスの保持への取り組みの必要性について

終わりに

はじめに

本報告に関わる調査および執筆は、田中睦（発達障害者支援道北地域センター きたのまち）と川俣智路（北海道大学 子ども発達臨床研究センター）が行っている。本報告書は共同執筆しており、分担は次の通りとなっている。

田中担当部分：3（ア）、3（イ）、4（ア）、4（イ）、4（カ）、5（ア）、5（ウ）、6

川俣担当部分：1、2、3（ウ）、4（ウ）、4（エ）、4（オ）、5（イ）、6

01. 調査目的

義務教育終了後、ほとんどの生徒は高等学校へ進学することになる。このとき発達障害のある生徒や疑われる生徒は、医療機関や療育機関を利用すること、側面からの支援を利用すること、こうした選択肢があるだろう。しかし、こうした資源に乏しい地域では必要な支援を享受できるとは限らない。そうしたときには、そうした生徒が毎日通うこととなる高等学校がそうした役割を必然的に担うこととなる。また家庭環境などの問題から、こうした支援を必要としている生徒に支援の手が届いていない場合にも、生徒への支援の窓口になりうる機関は高等学校であると考えられる。

本調査の目的は、こうしたその地域の中での受け皿的な役割を担っている高等学校の実態を明らかにし、こうした高校を含めて義務教育終了後の地域での支援をどう構築することができるか検討することである。本報告書は単に高等学校における発達障害のある・疑われる生徒への支援を検討するものではない。高等学校が受け皿にならなくていけない地域の現状、地域の中での生活の支援、地域への就労、などの地域を含めた状況を検討すること、広い意味での地域支援の構築を検討することが本報告所の目的である。

02. 調査方法

本調査は、07年11月から08年2月まで北海道内の調査高校で行われた。フィールドとなった調査高校は人口2万人の都市にある公立の昼間定時制高校である。全校生徒はおよそ40人程度、教員や職員は10人弱である。定時制高校であるが在籍している生徒のほとんどは決まった職業はもたず全日制の高校に通う生徒と同じような学校生活を送っている。カリキュラムの特色としては福祉に関わる資格を取得できることが挙げられる。自治体から補助金が出ているため、入学金や授業料などの負担が軽いのも大きな特徴の1つである。

在籍している生徒のほとんどは高校のある地域に居住しており、他の地域から通っている生徒はほとんどいない。調査高校はいわゆる「教育困難校」というレッテルを地域から貼られており、実際に様々な困難を抱えている地域の生徒を引き受けている。在籍している生徒には発達障害のある・疑われる生徒、家庭での虐待が疑われる生徒、経済面で困窮しており授業料の負担の少なから入学した生徒、学習面に非常な困難を抱えている生徒、対人関係面に大きな不安を抱えている生徒、などが含まれている。こうした生徒への生活支援、学習支援、就労支援などを行うことがこの調査高校の長年の課題となっている。

調査の対象は1学年と2学年を中心に行い、授業や学級内の活動の観察、教員への面接、放課後を利用した教員との情報交換を行った。観察では、授業中に生徒の学習への取り組みの様

子や、給食などを始めとする日常生活の様子を対象とした。教員への面接は全教員に平均2回程度行った。内容は現在の高校の実践における問題点や特別支援教育に対する考え方、卒業後の生徒の進路などについてである。放課後を利用した教員との情報交換ではこちらから観察や聞き取りの結果を教員にフィードバックし、その内容について情報を交換した。

なお、調査中に1度特別支援教育に関しての情報交換会を半日かけて行っている。また調査終了時には外部講師を招いてケースカンファレンスを実施し、生徒について議論している。

今回の調査では調査機関が半年あまりと短かったために、生徒を対象とした調査を行うことができなかった。これは調査者と生徒とのラポールの形成期間が十分にとれなかったこと、日常の実践の中で非常にデリケートな生徒に関わる問題が扱われており、調査者が生徒を対象とした調査を行うことでこうした問題がさらに難しくなる可能性があったことなどが理由として挙げられる。また同様の理由から生徒を対象とした質問紙調査や心理検査の実施なども難しいと判断し、実施しなかった。

これらの情報はすべて個別調査シート（巻末資料1参照）に記入しまとめた。個別調査シートは生徒個人に1つ作成し、「本人の基礎情報」、「発達に関連する情報」、「学習に関連する情報」、「学校への参加に関連する情報」、「家庭・地域・学校に関連する情報」を集めたものである。ここでの「学校への参加に関連する情報」は、学習以外の学校生活に関わる事柄にかんする情報という意味である。個々の設問は全部で18問ある。全18問に対応する情報は表1の通りである。重複している設問番号は複数の内容を含んでいることを示している。

表 1

情報と個別の質問の対応表

本人の基礎情報	1, 7, 13, 17
発達に関連する情報	3, 10, 13, 15
学習に関連する情報	4, 5, 8, 9, 15
学校への参加に関連する情報	4, 6, 10, 11, 12, 16, 17
家庭・地域・学校に関連する情報	2, 4, 18, 19

個別調査シートの最終ページにはまとめとして、＜発達の状況について＞、＜生育環境について＞、＜就学前のエピソード＞、＜就学後のエピソード＞、＜対人関係のエピソード＞、＜将来の展望など＞という5つの項目を記入する欄を設けている。

このシートの記入方法については「個別調査シート利用方法」というマニュアルを作成し（巻末資料2参照）、統一した記入の基準を作成した。また授業中など観察場面では観察の視点が統一できるように観察時の記入表（巻末資料3参照）を作成し、利用した。

03. 調査結果

（ア）調査日程・概要

調査の協力を得た高校は、昼間定時制普通科で、全校生徒数35名の1学年1学級、4学級（平成19年度は4年生は在籍者なし）である。校長、教頭、教員が11名、内2名が時間講

師、事務長、業務技師の関係教職員が15名で、養護教諭が配置されていないため、保健室を担当する教諭という立場をもうけ兼務している。

調査の回数は、平成19年11月から平成20年3月まで11回行い、始業の職員打合せから入り、授業見学・観察など、放課後、出席できる教職員とカンファレンスを行った。

第1回目 11月15日(木)

- ・ 学校長に挨拶
- ・ 朝の職員打合せの際、全教職員に紹介。
- ・ 授業見学・観察・記録：1・2年生を中心に、学校の授業体制と学級全体の様子を捉える。

－1時間目 1年 英語 I

- ① 小テスト・英語で記入が出来なくても、カタカナでの読みを記入することが許されている。
- ② 本時の単元の授業を教科書とプリントを使用し、全体指導。戸惑うと思われるプリントの箇所を板書し、説明を行い、生徒が問題を解いていく。

教員が机間巡視しながら、教員から声をかけヒントを出したり、生徒からの問いかけにヒントとなる応答が交わされる。特に、学習困難の生徒には、しばらく側でヒントに繋がる声かけが続く。生徒が個々にプリントの記入が終わると、周囲の生徒に教えて回る。

回答には、設問に対し、一人ひとりの生徒が答え、誤りの場合は教員がヒントを提示し、正解へと導く。

－2時間目 2年 数学 I 2グループに分かれ、グループ毎に1名の教員が付き2名体制。

- ① 1グループは、学級の教室で時間講師と授業。
宿題にしていたプリントの答え合わせに、生徒からの問いかけに応じながら回答していく。
本時の単元の教示。その後、練習問題。
- ② 2グループは、別の教室に移動し授業を受ける。
それぞれに、課題別の問題が出され、生徒は分からないときには、教員に問いかけ説明を個々に受けながらすすむ。

－3時間目

- ① 3年 現代社会 全体一斉授業
板書後、教示し、生徒へ問いかけ、生徒から応じることを繰り返す。生徒からは、授業内容に沿った問いかけなどの発言が見られる。
- ② 1年 数学 I 3グループに分かれる。
ひとつのグループを見学。特に、数学の理解が難しい生徒のグループで、生徒それぞれの課題別のプリントを個々に解いていく。生徒一人ひとりが分からないところは、教員に問いかけ、説明を分かるまで受ける。

－4時間目 1年 理科総合 一斉授業

生徒全体が窓側に机間を狭め、机をずらす。廊下側が広く空いた教室内の設営である。

資料を生徒一人ひとりに音読させながら、教員が内容を具体的に詳しく説明をする。生徒の中に、漢字が読めない、カタカナがスムーズに読めないなどがあると、生徒の中から読みを教える場面が、授業の流れの中にスムーズに取り込まれている。

－給食時間 別教室で1年生だけが給食をとるところで、一緒に給食を食べる。3人掛けのテーブルに生徒同士自由に友だちと、黒板の方を向いて着席する。

－5時間目 予定では、養護教諭から情報を伺う予定でいたが、不在の学校であると同う。放課後のカンファレンスの内容について検討。今後の支援内容の検討。

－6時間目 2年 英語 I
宿題の回答と説明。

－カンファレンス
教職員との意見交換。今後の支援体制のあり方説明。事例の現状の報告と、授業から観察された状況と、今後の対応について意見交換。

第2回目 12月3日（月）

◇学年を問わず、学級に入り見学・観察をする。
学校と、今後の支援内容の意見交換を行う。

－1時間目 授業見学・観察
2年 情報A 3年 現代文

－2・3・4時間目 学校関係者と今後の支援について意見交換。

－給食時間 1年と一緒に食べる。

－5時間目 授業見学・観察 1年 国語総合

－6時間目 授業見学・観察 2・3年合同 体育

－放課後：カンファレンス

・今後の支援内容について、以下のことを確認する。

◇学校としての希望

- ・退学者や休学者を出さない高校にする
- ・生徒それぞれのニーズと支援について知りたい

◇今後支援について具体的に提案

- ・生徒一人ひとりの実態把握（生活・背景・課題など）

注) 障害を明らかにすることが主とはならない。

生徒の状態像を表すことを中心に置くものである。

方法 1 情報の収集

2 個票の作成

3 個別観察記録

・学校の従業や生活の様子を記録する＝項目をおこし、記録表作成

4 観察後、教科担任と情報交換：それぞれの教諭から見た子ども像の確認

・生徒それぞれの支援内容の確認：心理面、学習面など

・情報をまとめ、学校、所属関係者に報告後、所属関係者より生徒に状態像に沿った、研修を企画予定。

◇情報交換

1. 新しい交友関係の紹介があり、授業や給食の時間の様子から、人を好きになることは年齢としては相応とは思えるものの、精神的な付き合いがどの程度なのか心配もあり、それぞれに経過観察することとなった。

2. 体育の授業時間、開始当初生徒と問答の内容説明。体育をするには不適切な伸縮性のない服を着ていたことから、見学者のジャージを借り着替えるよう指示したところ、生徒が並ぶ面前で着替えようとしたことについて、参加者から様々な意見が出され、反抗的だったのではないかなど、出されたが、異性との境界の緩やかさが、生活の中にあるのではないかと思われた。

3. 明日から学期末考査に入ることから、自習授業をしながら学習が極端に遅れのある生徒に20分ほど付きっきりで指導したが、基本的な事をかみ砕いて分かるように伝える指導はなかなか時間的に用意できないが、指導方法をこれまでと変更も考えなければならぬのかについて、自習だからこそかなりの時間を作って応じていただいたことは、本人にとって分かったこととなり、本人の分かり方が理解出来たのではないかと思われた。

4. 来年就職する卒業生ではあるものの、親の決めた就職口でつまづくことが予想される中で、本人自身が自分の考えを他者に伝えられない辛さを経過観察することとなった。

第3回目 12月10日(月)

◇1年 担当者それぞれ3名、合計6名の生徒を、毎時授業や給食時間の様子を観察・記録をする。

2学期末考査後、テストの答案用紙を返却し、回答と訂正の場面も観察出来た。

－1時間目：理科総合

回答返却 高得点の生徒の発表に賞賛の声が上がり、それに応じる生徒の様子がある

担当教諭が回答を黒板に板書し続けたことで、書き取りの難しさを抱える生徒が困難を示す姿が見られた。

－2時間目：家庭総合

一般授業 「衣服の管理」洗濯することを中心に、日常に隣接した話題でありながらそれぞれの家庭の異なりが表現される意見が出ていた。教示の単語の意味が分からず問いかける場面が

見られたり、内容に興味を持てず集中がとぎれる生徒の姿も見られた。

－ 3 時間目：数学 I

3 クラスに分かれ、学習内容が異なる。本人の分かるまたは少し分かる内容とし、分からない場合はほとんど先生に質問し、先生も真摯に説明する様子がある。

－ 4 時間目：体育

数日前に返却した答案の回答を行う予定と先生が伝えたが、持参するものと思った先生と、指示がなかったので持ってきていないという生徒がいた。全員がジャージを持ってきていたので、サッカーの授業に変更。変更の交渉の様子が見られた。運動の基礎的な動きから、競技の参加の様子を観察する。

－ 給食時間

自由に友だちとグループで着席、食事をし、様々な話題がある。徐々に担当者にも声を掛けてくる生徒が出る。

－ 5 時間目：国語総合

漢字検定の日程の表示があり、自分自身の受けたいと思う級のプリントを選び、自分自身で書き込む。まずは調べず自身の力で書き入れる。先生に多く問いかけをする生徒や黙って書き入れる生徒など、様々な自学の姿を観察する。

－ 6 時間目：基礎介護

テスト答案用紙を返却し、訂正では資料を見ながら行う。出来て先生から丸をもらった生徒が、書き込み最中の生徒に寄り添い、資料と一緒に探す様子が見られた。先生を呼ぶ、友だちに問いかける、友だちの回答を見せてもらう等様々な生徒の様子を観察

－ 放課後：カンファレンス 教職員と情報交換

一人の生徒ごとに、担当者から時間毎の様子について話した後、学級担任と教科担任から、中学校からの引継ぎ内容や家庭環境、学校生活での行動の様子、教科毎に学習の様子と、各教員に対する態度の異なり等が出席した教員から出される。

第 4 回目 12 月 13 日（木）

◇それぞれ 1 年生 3 名の生徒の、毎時授業や給食時間の様子を観察・記録をする年に数回行われる、3 学年合同の授業（体育）の風景をみることができた。

－ 1 校時：英語 I

内容は動詞の過去形について始めに教示と板書があり、その後例題を板書し、生徒から言葉が返ってくることにあわせ教員が書き込む、直していく。各自練習問題を行う。分からない、確かめたい場合、周囲に聞く、教員を呼ぶ生徒などさまざまな様子をみせる。

－ 2 校時：音楽

時間講師の教員。本格的なハンドベルを使用し、取り扱い方、片付け方などの注意を守りながら丁寧に扱う。クリスマスにちなんだ曲が選択されている。前時間の曲の復習後、全体で合わせる。全体の息があっている。新譜の配布。先生から鳴らす技術(体に付けて響く音を止める)、細かく振る等の説明。どこで使うのか、各自練習し、その後、全員で2度ほど通すと全体の曲が整う。

－ 3 校時：数学 I

3 グループに分かれ学習。これまでのプリントの続きを行う。一まとまりのプリントが出来ると次にステップアップする。同じ範囲のプリントを行っている場合、友だちが教える、聞く場面が見られる。

－ 4 校時：総合学習

畑でトマト、ジャガイモ、大豆、タマネギを育て、収穫し、調理や加工したこれまでの学習のまとめを発表するスライドや原稿作りを班ごとに役割分担し行う。教員が3人入り、それぞれに助言する。

－ 給食

自由な着席ではあるが、座る席はほぼ固定されている。

－ 5 校時：総合学習

4 校時の続き

－ 6 校時：体育

3 学年合同。ミニバレーボールを学年ミックスのチームが担当教員から発表される。学級では見られない、先輩や後輩の態度や表情が観察できた。

－ 放課後：カンファレンス 教職員と情報交換 (職員の担当会議と重なる)

担当者からの観察情報に加えて、教職員から情報の提供があり共有する。授業場面では知ることの出来ない家庭の情報があった。時間内で情報交換ができなかったことから、今回はこの度の続きから始めることとした。

第 5 回目 12 月 17 日 (月)

◇ 予定の生徒観察は、2 年生を予定していた。しかし、14 日 (金) に担任より、学級の生徒間でこれまでの担当者の動き等から、担任の説明で納得いかない言動がみられた。このことにより、17 日 (月) に行われる生徒観察が難しいこととなったことについて生徒指導担当者より15日連絡を受ける。

学校長を始め、関係職員と今後の体制を改めて検討することとした。

◇ 学校体制と教育委員会との連携の確認

- ・高校で保護者との協力体制を考える
 - 保護者に対し、校外からの支援機関と支援者の紹介、理由について書面にて伝える（19日までに発行）
 - 保護者の協力が得られる内容とするための相談
 - 生徒間の疑問に答えるためにも、保護者への説明を慎重に扱う。
 - 機関紹介を機関名称が発達障害という名称が付くことが、保護者には理解されるのか。心理士という名称が生徒たちには受け入れられるものなのだろうか検討された。
 - 保護者の受け止めを考慮し、名称を伏せるより説明する内容であることを求めた。
- ・教育委員会にあいさつ
 - 校長の計らいにより、教頭と共に教育委員会にあいさつに伺う。
 - 教育長、教育部長と懇談し、高校のこれまでと、教育委員会としてのこれまでの経過と地域として担われる高校としての存在を伺う。
 - 支援の継続の依頼がある
- ◇2年学級担任、副担任から情報収集
 - ・各生徒の学習状況、生活状況、それぞれの教員の考えと対応を伺う。
 - ・家庭状況の厳しさと環境の歪みから来ると思われる複雑な生徒の言動に苦慮する担任教員の疲弊した状況が出された。
- ◇時間講師から相談：生徒との対応の確認を求められる。時間講師としての大変さを伺う
- ◇3年学級担任から、緊急の生徒対応相談
- ◎家庭環境と生徒の関係を合わせて、教職員の大変さをより知り、地域としての高校の位置づけを知る機会となった。

第6回目 12月20日（木）

本日は終業式前日で、3時間目までの授業である。

◇保護者への担当者訪問内容の周知について文書配布〈特別支援教育の専門支援として〉

◇各学年に朝のホームルームの時間に自己紹介に回る

- ・1年から3年へ 生徒から問いかけがあり応じた。

ー1時間目 各学年を15分程度ずつ見学、観察

ー2時間目 校長室にて今後の打ち合わせ

ー3時間目 3学年 総合学習 情報処理室において、地域で行われる発表資料作成グループごとに、テーマが異なり、3名の教員が生徒に応じる。

ー給食 2・3年が給食をとる教室に入る。

担当者が入ると、席に誘いかけたり、話しかけに応じるなど以前より2・3年の生徒と会話する機会と雰囲気や和やかになった印象を受けた。（1年と2・3年と別の教室で給食をとるようになっている）

ー下校の様子を観察

昼の下校であったことから、保護者が迎えに来る様子と生徒が保護者に対する様子を観察する。

◇午後1時30分から研修会を予定していた。内容：「特別支援教育について」

しかし、当日の朝から生徒のトラブル解決に向けた対処があり、生徒が下校してしてから事情を知った保護者から電話があり対応に1時間以上かかり、開始時間が遅れた。

研修会：「特別支援教育について」講師：担当者 1時間程度 質疑応答

補足研修：虐待の中にいる親と子の特徴、虐待と非行のメカニズム、被害と課題の逆転関係など「虐待と非行臨床」橋本和明著を基に、担当者から解説

学校としての課題とこれまでの観察から意見交換

生徒対応と手立ての方向性の意見交換

◎学校外の担当者のそれぞれの情報を共有することが出来たことと、今後どのような研修が望まれているかについて意見交換を行う。

第7回目 平成20年1月21日（月）

◇2年 担当者それぞれ4名、合計8名の生徒の授業・給食の様子を観察・記録をする。

－1時間目：基礎介護 2名の教員が付く 来週が試験であることが言い渡されていた。

3名ごとのグループのメンバーを先生が発表し、ベッドメイクを交互に行う。先に学んだ手順を生徒同士確認し、分からなければ先生を呼び確認しながらすすむ。

一人実施し、一人がタイムを計る事から、もう一人が何もしないことになることで、別のところで手伝いをする生徒・座って実施している生徒に声をかける生徒などの様子がある。

実施した反省を各自レポートに記入する。最後の一人が実施しているときに、自分の記入する事でタイムを計る生徒がいない事から先生が計る様子もある。

－2時間目：簿記と福祉演習 選択により分かれる

簿記を見学・観察。 2名の生徒

当座預金 当座借越 の借方か貸方のどちらになるのかの理由を教員が説明したことを、自分なりの言葉で記録している。

－3時間目：英語

教科書とプリント使用 教科書の本時の学習のページの中から、単語で分からないものをそれぞれに問いかけていく。問いかけに教員が板書し、生徒に問いかけながら意味を伝え書き出す。教員が板書すると、生徒が記入する。終わると文法の説明。教員は英語で発音したことに対して、日本語で似た言葉を言っている生徒、自分の名前を呼ばれたように聞こえるといつて、発音する度に「はい」と返事をする様子がある。

－4校時：保健 身体の衰えについて

聞き慣れた言葉について学ぶ場合には、生徒からどのような事が問いかけ、応えを板書するようにしているようである。先生自身の体験なども交え、展開する。身体に係わる体型や内臓、血液など。かかりつけの病院と総合病院の違いから、総合病院を利用している生徒がいるか先

生から問いかけがある。

ー給食 担当者が1年教室と2・3年教室にそれぞれ分かれて入る。

ー放課後：カンファレンス

2年生一人ずつ、参加している先生方から生徒の印象と授業での様子をうかがう。

教職員の参加数に比して、答える先生に限られる様子がある。

2名の生徒の話が出来なかったことから、次回に何うこと事とした。

これで1・2年生の観察が終了する。

第8回目 1月28日（月）

◇この日は年に一度行われる「総合的な学習の時間」発表会前日のリハーサルが、会場となる市内公共施設で行われた。生徒は学年ごと、時間をずらして現地集合現地解散であった。

いつも全体で話を伺う形式を取っていたことから、時間で空いている先生がいらっしゃることから、個別に情報を伺うこととした。合間をみて、発表の様子を見たいとも思っていた。

問いかけのテーマは特に用意せず、それぞれの先生の話したいことに応じる形式を取る。

3年担当教員

気になる生徒の行動と就職後を不安に思っていることがあげられる。社会に出て、生活をするには、もう少し時間が必要なのではないか、非常に心配をしている。

進路が決まらず、特性にあわせて仕事を紹介するが、本人が決めかねることがあげられた。

3年担当教員

以前、前任校にいた生徒の様子を、二校目である今の高校での様子から、行動の異なりや共通点が出される。

会話を殆どしない生徒と部活動を通して、僅かでも会話を心がける継続的な試みが出された。

一人の生徒の事で学級全体の授業が出来なくなる大変から、どのようにかかわったらいいのか仲間の先生方に相談しながらここまで来た経過を話す。かわりにくさを感じる特定の生徒がいることが出された。

1年担当教員

これまで難しい高校を経験してきたが、この学校で始めて出会うような生徒がいる。

説明をしても、授業内容が伝わらない事が一番困り、怪我をしないよう配慮する。

学校全体を通して、または学級事の課題が見える中、気にかかりながら授業に入った時に指導をしている。

1年担当教員

年度始めに厳しく指導したことを思い出しながら、今の学級の様子を語ることは少ない。

何をどのように言ったらいいのか、思いつかない様子であった。

校長一来年度に向けた学校の取り組みについて話を伺った。

◎教職員ひとりごとに話を伺うことで、それぞれが思っている教育感や教員からの生徒の様子を伺う機会となった。

◎全員の先生に伺うには、次回この度以外の教員に個別に伺う予定とした。

第9回目 2月4日（月）

◇前回の教職員の方々からの情報収集の続きを行う。

職員朝の打ち合わせの際、教職員への個別の情報収集に関して、文書を添付し再説明を行う。

生徒の放課後支援にかかわり、アルバイトをしている生徒に直接アルバイト先と訪問許可の承諾を得る。

3年担当教員

就労先が決まった生徒ではあるが、本人の発達の課題が明確であることもあり、離職が予測されることから本人が1年時か希望していた職種などを振り返る。

教科の授業体系の工夫と、限界を感じる幅広い生徒層への試行錯誤を伺う。

幼児期からのライフサイクル事のかかわりと移行の繋がりが必要さが語られる。

今後のインターンシップや校外活動など、地域の結びつきと生徒の達成感に繋がる意見交流。

3年担当教員

教科担当として、就職する生徒の特性を生かした先なのかどうか、活動を通して関わった経過を踏まえ卒業後の心配が出される。

生徒自身が進路決定し、専門教科に対して意欲的な姿勢を見せるという。

学級の生徒個人の特性と学級全体の動きの様子を伺う。

生徒の背景にある環境への心配と、学校として出来ることについて話がある。

3年担当教員

高校に入ってから新しい教科であることから、これまでの知識が必要となる学習内容ではない。生徒のこれまでの状況をおおよそ把握し、自身で確認しながら授業を進めている。

発達障害や特別支援教育が少しずつ分かってくると、どこまでどのように接したらいいのか、注意や声かけに戸惑うこととなった。発達障害についての意見交換を行う。

5時間目1年、6時間目2年 基礎介護 授業見学

1年生—体育館で実技 教室に戻る際、アルバイト先等について問いかけ。

2年生—実習室でシーツ交換実習 移動後、教室でアルバイト先等についての問いかけ。

学校長と学校評価についてまとめの内容を伺う。次回、アルバイト先訪問を予定する。

第10回目 2月12日（火）

前回のアルバイトをしている生徒へのアルバイト先の訪問について、2年担任が生徒からアルバイト見学の意図について問いかけがあったことを、生徒指導の教員を介して電話連絡があった。

2学年学級担任は、生徒からこれまでアルバイト先での不満や、選ぶ基準など聞き知っていたこともあり、生徒からの疑問を考えると見学に行くことについて、教員自身も答えられない

ことと疑問があった。

このことから、予定していたアルバイト先訪問を見合わせ、2年生担任教員に今後のことについて相談することとした。2年担任教員の意見を充分聞くことに重きを置く。

授業が3校時までで、給食後放課となるため、放課後2年担任教員と話をした。

＜生徒からアルバイト先のことについて＞

- ・中学校の時の友達と会わない場所を選ぶ。
- ・雇用契約と異なった内容でも、事業主の求めに応じている。
- ・言葉での意図がくめず、時間を間違え叱られることがある
- ・正月三が日に、休みの予定だったが、急に来て欲しいと連絡があり、断らず求めに応じている。他校の高校生が休む。
- ・担任には、意見を求めるわけでもなく、大変さや辛さ、不満などをつぶやくように言うてくる。
- ・アルバイト先で職員に叱責を受けるが、自分のこととして受け止める。
- ・アルバイト先を替えずに、同じところで働き続けている。

◇担任教員から

- ・生徒たちが、様々な場面で大人（教員を含め）からの問いかけなどに疑念を抱き、問いかけてくることが多い。
- ・2年生の生徒たちのことを、生徒たちの背景を含めて考えた時に、そうせざる終えない言動であることを、学校の中で分かっているのが、私だと思う。
- ・生徒と学級担任は、学校での出来事を中心とし、信頼関係が気づかれている。あわせて、学校外でのアルバイト先での出来事を話す内容から、生徒たちが受けるアルバイト先での大変さを、本人たちが何とか切り抜けていることを知ることが出来た。担任教員と意見交換をし、この度は訪問をしないこととなった。

第11回目 2月27日（水）

午後からのカンファレンスに向けた、担当者との打合せ

これまでの状況の共有と情報交換

3校時：授業見学

1学年：基礎介護…個別実習テスト

2学年：数学 2クラスに分かれる

◇カンファレンス

校内研修 外部講師を招いて行う

内容：発達障害と対人関係性、環境因からくる精神発達の偏り躓きの状態と理解について

教職員からの質疑応答

- ・学習に遅れのある生徒へ、本人の苦痛にならず授業を展開するには
 - －ゆっくり育つ、ゆっくり成長することを念頭に置き、どこで躓いたのかの把握を
- ・数概念が全く積み上がらず、具体的な指導の提示から
 - －社会の中での苦悩を考え、生活能力をあげる、生活に密接した内容とし、本人に勇気と

励ましを伝える。認知特性の把握も知る必要がある

・対人面が、大人に対して反抗的で、関係を求める生徒たちに育つのだろうか。

一人と関係を取りたいと思っの行動であり、本人の心根を知ることとする。

－社会のルールやかかわり方を学べなかつた、個人の背景に寄り添う。目的を止めるのではなく、社会的に許せる範囲を投下する。

・特別支援教育が進んでいるが、モデルを確保することが難しい。

－生徒・学校に合つた独自の高校特別支援教育体制を作る事であり、モデルがあるようでない。生徒は信頼したいが裏切られてきたなどの不安が、守られていると確かめ続ける。助けてもらいたいと理解し、サインを受け取る、話を聞けるタイミングとなる。仮説を立て関わってみる。教職員が、生徒たちの大人のモデルとなることも考慮し、生徒と糸を繋ぎ、いつも気に掛けていることを伝えていく。

－この学校で、学べた・過ごした・出会つたことと思えるよう、生活者モデルのかかわりとして、励ましの言葉かけ・認め合い、助け合う、教え合うなど。

(イ) 面接調査結果

学級の担任や教科担任など、立場の異なつた教員によって生徒が見せる様子が異なる中で、それぞれの教員が受け止める生徒像である。

① 生徒の発達について

授業時間に、頻繁に体を動かしたりおしゃべりをするなど、落ち着きのなさが見られる生徒や、教員などの大人と話をしたがる生徒、授業時間や休み時間などほとんど話をするのではないが話しかけると、うなずきやほほ笑みなどで応じる生徒などがある。

言語表現では難しい言葉をつかうが、お礼や感謝の言葉がつかえなかつたり、言い訳が多いなどの様子がある。また、授業時間の教示内容が、ほとんど理解できていない様子の生徒もいる。

教員が話しかけると急に泣いたり、個別に話をすると素直になり、泣きながら話をするなど情緒的に不安定な生徒がいる。学校が始まって数ヶ月間は休むことが続いたが、その後、クラスで話をするようになったり、話を合わせる様子がみられる生徒もいる。

褒められることを嫌がってわざと間違えたり、思いやりの行為を喜びとして受け止められない様子もある。

人との関わりでは、物を隠したり、異性に近づきすぎる距離であつたり、指示とは異なつた自分なりに行動をする生徒もいる。

② 生徒の家庭環境について

家族構成では、母子家庭、継父、継母の家族できょうだいが多い家庭などもある。また、家族の収入では困窮していたり、アルバイトをして家計を助ける生徒もいる。

高校卒業後の進路について、進学費用を生徒自身で用意しなければならないことから、アルバイトをする生徒もいる。

家族の経済的負担を考え、授業料が安い学校であることと、資格が取得出来ることを目的としている生徒もいる。

家族の中に障害がある生徒もおり、気遣いながら過ごしている。

学校では誰に対してもよく話しかけたりするが、家庭では家族とほとんど話をしないという生徒もいる。

昼間定時制であることから、授業後、アルバイトがあり下校する生徒いる。

③ 生徒指導について

規律ある生活態度を身につけることを基本にかかわり、学校のルールの徹底を心がけて行きながら、時間の経過と共に生徒に合わせた対応をしている。社会に出て、最低限の必要なことは身につけさせていきたいと考えている。

校内でのトラブルから、指導の徹底を図るなど、時々に応じて対応してきた。

教員が出来ることと出来ないことがあることを明確にしながらも、生徒の話を聞いてきた。クラスの半数の生徒が、人を信じるのが出来にくい問いかけが続き、どうしたらいいのか生徒の言動に戸惑う。

④ 学級運営や行事について

学級全体で取り組む行事を、地域の方々の前で披露するなど、地域との交流を学校全体の行事に加えて行っている。

学級の中で発言を多くする生徒と、少ない生徒の両方を捉えながら意見を調整するように心がける。

インターンシップを5日間行っているが、職場で体験することが生徒たちにとって重要だと実感する。例えば、行事の活動を通して、小学校や中学校で不登校の経験からか、体験を積んでくることが少ないと感じる場面からである。

家族から電話や訪問などで、生徒の相談や、学校・学級・保護者に対しての要望に応じる。

⑤ 教科学習について

数の計算で、具体物を操作することで理解があるが、数字からは計算が分からない、文章題から数式を導くことは難しいが、一定パターンの文章題から式をたて、計算することが出来る。

国家資格を取得することを目的として入学してきている生徒が数名おり、入学時から4年生まで在学する意志がある。授業も、専門教科での得点が高いなど意欲的に参加している。

教科の教員がひとりの場合、学級内に複数の教員がつくことが難しい。生徒がストレスを感じず、教員が授業の内容を工夫し、集団の中で教科の学習に触れさせたいと考える。

読解力が困難であることを自分で出来ないこととして捉えているが、実技をとまなう授業では、手際が良く、他の生徒の見本ともなる生徒がいる。

板書に移すことに何度も見ないと書き終わることが難しく、ノートをとることに時間がかかる。勉強をやろうとする意欲はあるが、一人で学習することが難しい生徒がいる。

⑥ 生徒との関係性とコミュニケーションについて

授業時間に、他の教員や他学年に対する反発を聞いてもらいたがり、授業が成り立たないことが続く。学級担任に、家庭・アルバイト・学校生活など様々なことを、話しかけたり相談を持ちかけてくる。

普段から殆ど話をしないことから、社会に出てからコミュニケーションで支障が出るのではないかと心配をしている。教員によって交換ノートで、絵と文字で情報を交したり、場面によって言葉で表現することを繰り返し行うことをしている。

授業の中で、生徒が話をしてくることを聞き入れながら、話題を提供するようにしている。どこまで注意したらいいのか、どこまでやっていいのか、注意をすると、反発をするなどから戸惑うことがある。

⑦ 教員同士の関係性や協働について

教員数が少ないことや、教科によって全学年を担当することから、それぞれの学年の出来事を全教員が知ることにもなり、学級担任の大変さを感じている。

教科の担任が、学校にひとりという教員がほとんどで、教科によって複数の教員が入る場合もある。

(ウ) 調査シート作成の結果

調査シートは調査高校の1学年と2学年の調査することが出来た20名の生徒を対象に作成した。ここでは、作成したシートの全体の傾向について説明したい。

本人の基礎情報の項目からは、次の特徴が見出された。まず身体疾患や発達に関することで医療機関を利用した経験のある生徒が多いことである。発達に関わる相談、ぜんそく、その他の身体疾患等で医療機関を利用している割合は全体の25%であった。これは調査高校の多くの生徒が、日常生活を送る上でストレスを感じていることを示している。また、中学校までの学校生活でいじめられた経験のある生徒は全体の10%おり、不登校状態を経験している生徒は35%であった。ここからも調査高校には日常生活を送る上でストレスを感じ、生きづらさを感じていると思われる生徒が多くいることがわかる。しかし一方で、部活動などの活動や学校の行事活動、あるいは生活の中で非常に努力して良い評価を得ている生徒も数多く在籍しており、こうした能力に目を向けていき伸ばしていく必要があることも同時に明らかとなった。

発達に関連する情報の項目からは、次のような情報が得られた。発達に関する相談の経験がある生徒は全体の15%であった。また学力に関して小学校卒業程度の問題を解くことが難しいような著しい不得手がある生徒は全体の35%、また言語表現が極端に少ない、あるいはつたなさが感じられる生徒は全体の20%であった。このことはすぐにこうした生徒に発達障害があることを示すデータではない。しかし、これらの状況を「生活を送る上で支障が生じる困難」という点で考えるとき、こうした生徒たちは少なくとも学校生活や日常生活を送る上で、何らかの困難を抱えていて支援を必要としていると言えるだろう。しかしこうした状況にもかかわらず、多くの生徒は継続して学校に登校できている。これは生徒自身の努力と、サポートしている保護者や教員の取り組みがある一定の成果を上げていることを示すだろう。

学習に関連する情報の項目では、すでに述べたように授業中に小学校で本来習得すべき基礎的な内容につまずきがある生徒が全体の35%在籍していること明らかとなっている。同様に、授業中の観察から、読む速度が極端に遅い、あるいは読み間違いが多い生徒も一定の割合で在籍していることが明らかとなった。また学習内容の習得以前の問題として、教員の指示が少しでも複雑になると指示が理解できなくなる生徒、教科の内容自体に抵抗があり学習に意欲的に

取り組むこと自体が難しい生徒，授業への注意・集中が難しいために授業の内容を追いかけていけない生徒，なども多く観察されている。こうした状況の原因としては，生得的に注意・集中が苦手である，極端に苦手な分野が存在する，今まで様々な理由で中学までの学習を習得する機会がなかった，などの理由が考えられる。個々の生徒の学習の苦手さの理由は異なるにせよ，こうした生徒に対しては習得しているレベルまで戻り，順に学習を積み重ねていく必要があると考えられる。一方で生徒は意欲的に学習に取り組み，一部の生徒は放課後や長期休暇を利用して学習に取り組んでいる。こうした生徒のモチベーションを大切にすることが必要であろう。

学校への参加に関連する情報としては，次の3つの特徴があげられる。1つ目として，他者とのコミュニケーションを苦手とする生徒が多いことである。数多くの生徒は学校生活の中で他の生徒や教員と良い関係を築くのに多くの時間が必要としており，極端に周囲とのコミュニケーションが少ない，たびたびトラブルを起こす，などの状況が確認されている。2つ目に，教員に対して不信感を示したり，大人自体に不信感を持つ生徒が多いことである。この点に関しては教員がこうした生徒への対応に苦慮しており，教員への聞き取りで多くこうした点が語られている。こうした特徴を持つ生徒は，過去に大人に裏切られた経験や不適切な関わりをされていた経験があることが予想されるだろう。3つ目に学校行事や部活動に対して積極的に取り組んでいる点が挙げられる。これは生徒自身の高校生活に対する前向きな態度と教員の指導の成果であり，調査高校での実践を支えるとても重要な要素であると考えられる。こうした生徒が達成感を得られる機会は，生徒の高校での居場所や学習意欲，苦手分野への取り組みの意欲につながっていると予想される。

家庭・地域・学校に関する情報では，家庭状況の難しい生徒が数多く確認された。父母の離婚，経済的困難，家族を支えるためのアルバイト，年齢不相応に家族の世話をする必要に迫られること，こうした状況を抱える生徒が多く在籍している。また虐待やネグレクトが疑われる家庭もあり，教員の対応にて何とか登校している生徒も少なからず存在している。こうした生徒への支援は現状では教員が一手に引き受けることになっている。

なおこの調査シートを作成できた生徒はすべて生徒ではなく，一部の学校に来ることが出来ない生徒，さらに卒業間近であった3年生は調査シートを作成することが出来なかった。こうした今回対象にならなかった生徒も，それぞれ難しい点を抱えながら生活しており，支援を必要としている生徒がいることを最後に付け加えておきたい。

04. 考察

(ア) 生徒の発達について

定時制の普通科の中に，それぞれの生徒たちの持つ能力と周囲との関係性から，言葉や場面の受け止めに歪んで捉えたり，情緒的に不安定になると思われる生徒がいる。また，発達にアンバランスさがあり，対人面や行動面で周囲に対して言語表現が出来なかつたり，場面に適切に応じることが困難な生徒の様子が伺える。その中に，不登校を経験する生徒もいる。

(イ) 生徒の家庭環境について

家庭の経済状況に余裕がないことや，家族構成や関係が複雑である中で過ごしている生徒が

少なからずいる。そのような中で、生徒の言動から虐待が疑われる場合があり、家庭での安定した居場所が保証されているのか懸念される。

(ウ) 生徒の学習状況について

授業中は、注意・集中が続かずに教員が説明する内容を理解できない場面、内容を理解できずに授業についていけなくなる場面、小学校で習うような基礎的な内容を理解できない場面が多く観察されている。高校ではこれらの対応として、数学での習熟度別のクラス編成の導入、ベーシックスタディという基礎学力や学習レディネスを高めることを目的とした独自の授業の導入、放課後などを利用しての補習の実施、成績評価の基準を変更、などを対策として行っている。また一斉授業であっても、教員は全生徒の理解度にできる限り配慮しながら、授業を進めていることが観察された。そのためどのようなレベルの生徒であっても、生徒個人の能力と目的に合わせた形で授業が進められている。しかし、こうした取り組みにもかかわらず教員から学習の定着の難しさ、積み重ねの少なさを問題とする声が多く聞き取られている。

基礎レベルの学力が定着しておらず学んだことが定着しにくい理由として、小学校や中学校での授業時間や学習の機会に丁寧な指導が受けられず学習そのものの機会を奪われてしまったケース、もともと極端に苦手な分野があった上にそれをフォローするような学習の機会がなかったケースなどが考えられる。前者の場合には、調査高校に入学後に基礎レベルから積み重ねているために、卒業後日常生活に支障がない程度まで学力を伸ばすことも可能である。それに対して後者の場合には、学習障害が疑われる場合もあり、専門的な視点からの支援とそれに基づく学習でなければ効果が得られにくいことが予想される。

(エ) 生徒の学校生活について

入学した生徒のおよそ7割はほぼ毎日通学することができており、学校に参加することに対する意識は非常に高い。これは調査高校の教員が家庭との連絡を取りながら生徒個人の状況を把握し、日常生活において積極的に関わりをもっていることに起因すると考えられる。

入学者の3割程度は退学、休学、不登校状態にありこうした生徒に対しての対応は調査高校の1つの課題である。こうした生徒に対して調査高校では不登校の生徒用の単位認定を行うなどの工夫を行っている。また教員も保護者と密に連絡を取りつつ、生徒に対しても連絡を取ったり部活動の参加を促したり、様々な取り組みを行っている。

(オ) 生徒の進学・就労状況について

生徒の進学・就労状況は年度によって異なるが、毎年およそ進学が3割程度、就職が5割程度、未定が2割程度である。進路指導は2年生から始まり、インターンシップ、福祉の現場での実習、職業適性検査なども取り入れられている。教員への聞き取りからは、調査高校の修了時には福祉関係の資格を取得できるように福祉への道を選択する生徒が多いがその適正を見極めるのが難しいこと、就職しても長くその職を続けられるか不安があること、進学しても長く通えるかどうか、あるいは経済的に通い続けることが可能かどうか不安であること、といった点が語られていた。また授業での丁寧な積み重ねにもかかわらず、就労するに十分な学力を得られない場合もあるとのことである。

(カ) 教員の労働状況、およびメンタルヘルスについて

生徒の中には家庭環境に厳しさを抱えていることもあり、そういった生徒への対応は教員全員で応じている。特に学級担任は、生徒数は少ないが、対応の難しい生徒もいることから、細かな悩みや疑問の相談を受けることが多いことに加え、生徒の持つ歪んだ考えへの対応に苦慮している。

また、経済的に困窮している家庭に対して、生徒と家族に対し、全教員による様々な配慮が求められることになり、特に、学級担任の身体的・精神的負担は大きく、疲弊する状況にある。

05. 提言

(ア) 発達・家庭環境支援のための学外連携ネットワーク構築

調査高校は、市街地からかなり離れた、周囲が農地に囲まれた郡部にあり、市街地には他2校の高校がある。生徒数が少ないことから、教員数も少なく、保健室はあるが、養護教員が配置されていないため、教員の中から保健担当を兼務している。生徒数は少ないとはいえ、個々に抱える発達や家庭環境の課題は大きく、校内の教員が負担するところは大きいことから、周辺地域を含めた支援機関との連携が必要と考えられた。生徒の発達から、教育が困難な様子があり、教員と生徒をサポートする上でも、周辺大学等の協力が必要であると考えられる。

家庭環境から経済面で家族が困窮しているところには、生徒をサポートする上で、保健福祉行政機関のソーシャルワーカーなどとの連携により、利用可能な情報提供を得ることも必要と思われた。

発達や過程環境から、医療機関として、地域には様々な医療機関と精神神経科を含めた総合病院があり、臨床心理士の支援もあることから、連携をとることにより生徒の実情に応じて支援が受けられることも考えられる。生活指導上で警察との連携はこれまでもあるが、学校や生徒の実情を理解した上での支援が求められる。

生徒は地域に就労することもあり、少し離れた周辺地域にあるハローワークと、学校側からこれまでも連携しているところではあるが、より密な連携が必要と考えられた。地域の資源でもある機関との連携は、定期的に連絡をとり学校と生徒の実情を把握した上で、場面に応じた支援が受けられるものと考えられる。

(イ) 進学・就労のための地域ネットワークの構築

進学・就労は高等学校における、最も重要な目標であり、最も地域との連携が求められる分野でもある。調査高校では進学・就労支援のために既に述べたように、インターンシップを行っているほか、進路指導担当の教員は地域の様々場所に自ら赴き積極的に協力先を探している。このような取り組みが個人の教員に頼っているのが現状であるが、これは地域ネットワークの構築の一環と考え、本来ならば行政が積極的に支援する必要があるのではないだろうか。地域の高校を卒業した生徒が地域に就職して、地域の中で必要な支援を受けながら生活していく、という構図はまさに地域ネットワークそのものである。その出発点になりうるのがこの調査高校の取り組みであろう。具体的には、インターンシップへの協力先の募集、インターンシップ受け入れ先への助成、ハローワーク等の就労援助機関との連携の強化、こうしたシステムを早急に構築する必要があるだろう。

(ウ) 教員のサポートのために必要となる人員及びメンタルヘルス保持への取り組みの必要性について

調査高校は、地域の中学校にとって、とにかく入れる最後の砦のような役割を担った高校でもあり、不登校傾向、学習困難、経済の困窮、虐待と思われるなどの生徒も、ここであれば通えると地域の保護者や教員が負のイメージを抱いている。

これまでいくつかの高校を経験してきた教員も、調査高校での生徒と保護者の対応に最善を尽くしながらも、高校の教員としてのやりがいと充実感以上に負担が大きいものであり、それぞれの教員のメンタルヘルス保持のために、外部相談機関を学校内に取り込む必要がある。

調査高校に通う生徒と保護者の対応には、虐待を予防する専門的な知識を持った専門家を配置が必要で、教員が抱え込まない教育現場を確立しなければならない。

また、教員と生徒のメンタルヘルスの保持のために、地域の立場から離れた学生ボランティアが、生徒の間に入る仕組みが必要である。

終わりに

義務教育を終えた高校に、しかも昼間定時制高校というあまり聞き知ることがなかった高校の教員と生徒に調査として、5ヶ月間ほど出会う機会を得た。

調査高校は3学期制で、調査期間に期末考査の前後の教員と生徒の様子から、義務教育にはない単位取得の経過をみることもなった。高校の関係者とは異なる私たちの訪問は、教員と生徒や保護者にどのように捉えられていたのかなど、こちらからの心配りが十分ではないと思われたが、学級に入り授業見学、放課後のカンファレンス、教員との個別面接など、調査高校の教員の方々に多くの協力をいただいた。

実情が分かるにつれ、生徒の抱えていることは、学習に加えて家庭の環境が大きく影響している生徒の多いことに気づかされた。生徒数は少なくとも、教員が教育以外に抱えることの大きさから、少人数の教員間で生徒と保護者のことを、情報共有と意見交換をしながらの日々が繰り返されていることを知ることとなった。

調査高校の校舎は、昭和30年代に完成後増改築を繰り返し、大切に使われている学校であるが、調査期間が冬だったこともあり、教室でも暖房器周辺から離れた座席では外套が必要な状況にあり、教員が生徒に健康管理に向けた様々な暖房手段を提供していたことも印象に残った。

生徒の様々な状況を知るにつれ、教員の寄る辺なさとも思える大変さから、専門家の配置確率を願うことになった。

このように規模が小さな学校であっても、それぞれに抱える課題の大きさがあることを知る調査の機会をいただきましたことに感謝いたします。

(発達障害者支援道北地域センター きたのまち 田中 睦)

長いようで短い調査期間の中でこうした地域の高校の貴重な実践を学ぶ機会を持てたことをとても嬉しく思っております。ただこうした調査は短期的には受け入れ側は利益が得られることは少なく、逆に不利益を被ることが多いものです。今回の調査もやはり私たちが調査したことにより、こうした不利益があったのではないかと思います。そのことについてはただただお

詫び申し上げるしかありません。しかし、その結果としてこのような貴重な資料が報告されることになりました。この資料が少しでもこの先の高校実践を考える材料として役に立てば幸いです。そして長期的な視点で見たときに、この調査が行われた意義が改めてはっきりすればこれほど嬉しいことはありません。

最後になりましたが調査にご協力いただいた調査高校の生徒の皆様、保護者の皆様、教職員の皆様に厚くお礼申し上げます。また今回の調査を支えてくださった、北海道保健福祉部福祉局障害者保健福祉課就労支援グループの高橋さんにも厚くお礼申し上げます。そして、今回の調査を引っ張ってくださった田中睦先生、快く出張に送り出してくださり時に相談に乗っていただいた子ども発達臨床研究センターのスタッフの皆様にも感謝申し上げます。

(北海道大学 子ども発達臨床研究センター 川俣智路)

士別東高校 個別調査シート

学年 _____ 名前 _____

調査期間 _____ 年 月 日 ~ _____ 年 月 日

<事前に確認できた情報>

1<本人の生育歴>

2<家族に関する情報>

3<発達に関連する情報>

4<小・中学校生活の状況>

5<高校での学習状況>

6<高校での生活状況>

学習面についての記録

7 授業中の様子について時系列に簡単に記入する

--

8 その科目の内容と、それに対する具体的な到達点、できなかった部分はどの部分か

観察からの情報	先生への聞き取りから

9 特に目立って困難を抱えている分野はどこか、支援の必要な点はどこか。

観察からの情報	先生への聞き取りから

授業中の様子についての記録

10 授業中に他の生徒とどのような関わりを試みたり、持ったりしているか

観察からの情報	先生への聞き取りから
---------	------------

11 授業中に先生とのやりとりはどのような形で行われているか

観察からの情報	先生への聞き取りから
---------	------------

12 その他、授業中の様子として、特に目立った点は何かあるか

観察からの情報	先生への聞き取りから
---------	------------

先生への質問

13 この生徒の印象はどういったものか。日常接していて何か気になっていることはあるか。

--

14 この生徒の学習到達レベルについてどう感じているか

--

15 この生徒の学習以外の学校生活に関して何か気になっている点はあるか

--

16 この生徒の行事活動や、部活動などへの参加状況はどのようになっているか

--

17 この生徒の指導で、困難を感じる点はどこか

--

18 この生徒の進学・進路などの見通しはどうなっているか。将来への不安は何か。

--

19 この生徒の家族に関して何か感じる点、困難な点は何か。

--

情報のまとめ

<発達の状態について>

<生育環境について>

<就学前のエピソード>

<就学後のエピソード>

<対人関係のエピソード>

<将来への展望など>

個別調査シートの利用方法について

(第1版)

概要

- このシートは、本人の基礎情報、発達に関連する情報、学習に関連する情報、学校への参加に関連する情報、家庭・地域に関連する情報の5つの軸からなるシートである。全ての質問はこの5つの軸のいずれかに属することになる。各質問が属する軸は以下の通りになっている。
 - ▶ 学習に関連する情報は、発達に関連する情報に関わる項目であるが、学校では特に学習は大きな課題となるので、別の概念として扱っている。

本人の基礎情報	1, 7, 13, 17
発達に関連する情報	3, 10, 13, 15
学習に関連する情報	4, 5, 8, 9, 15
学校への参加に関連する情報	4, 6, 10, 11, 12, 16, 17
家庭・地域・学校に関連する情報	2, 4, 18, 19

- このシートは、個人に1冊作成される。内容は、フェイスシート、＜事前に確認できた情報＞、＜学習面についての記録＞、＜授業中の様子についての記録＞、＜先生への質問＞、＜情報のまとめ＞からなる。
 - ▶ ただしこのうち、＜学習面についての記録＞、＜授業中の様子についての記録＞、＜先生への質問＞、の3つの情報については、観察した科目数の分だけ存在することになる。
- シートの構成は以下の通りである。

<ol style="list-style-type: none"> 1. <事前に確認できた情報> 2. <学習面についての記録> 3. <授業中の様子についての記録> 4. <先生への質問> 5. <情報のまとめ> 	}	観察した科目の分だけ作成する。
--	---	-----------------

<事前に確認できた情報>について

- ここでは、学校側や本人から得られた情報について、事前に記入する。
- NO. は、記録の順番に001, 002・・・と振っていく。
- 記入は欄に沿ってパソコンから打ち込んでも、手書きでも、また資料を貼り付けるのでもかまわない。足りない場合は裏面を使用する。

- 3「発達に関連する情報」は、家庭・地域・学校を問わず発達の状況に関連するようなエピソードについて記録していく欄とする。
- 6「高校での生活状況」は日常生活，給食，行事，部活などのエピソードを，5「高校での学習状況」は主に授業中の様子や勉強の進み具合，能力について記入する。

<学習面についての記録>について

- 7「授業中の様子について時系列に…」では，時間ごとに何をしていて，課題は何時に始め何時に終わったか，席の立ち歩きした様子，友人との私語，などの学習面と授業の様子について簡単に記録する。
- 8「その科目に内容と，…」では，課題をきちんとこなしているか，ノートなどのメモができているか，指名されたときにスムーズに応えられるか，等を観察し記録する。必要があれば授業終了後に，教科の担当の先生に簡単な質問を行い，情報を補足する。
- 9「特に目立って困難を抱えている…」では，学習の中でも特にどの面に根本的な難しさがあるかを記入する（例：数字の扱い，書字，読字）。また教科の担当の先生に簡単な質問を行い，情報を深めておく。また，支援の必要な点についても簡単にその時の印象を書き留めておく。

<授業中の様子についての記録>について

- 10「授業中に他の生徒と…」では，生徒同士のやりとりについて記録する。
- 11「授業中に先生とのやりとりは…」では，先生とのやりとりについて記録する。

<先生への質問>について

- 13～18 までの質問は，先生から話を聞いてまとめる。
- 細かい話でもかまわない。また複数の先生から食い違う内容の話があった場合にも，そのまま記録として残しておく。
- 全ての質問項目について尋ねる必要はない。空欄があってもかまわない。

<情報のまとめ>について

- ここではそれまでの情報をまとめて，1枚の用紙にまとめておくことを目的とする。
- この用紙には複数の先生の情報がまとめられることになる。どの先生からの情報かわかるように情報の後ろには（田中）のように，先生の名前を記入する。事前情報の場合には（事前），観察の場合は（観察）と記す。
- 足りない場合は裏面を使用する。

巻末資料3

月 日 曜日 1, 2, 3, 4, 5, 6 時間目 科目 担当の先生 先生

学習面についての記録

- 7 授業中の様子について時系列に簡単に記入する
- 8 その科目の内容と、それに対する具体的な到達点、できなかった部分はどの部分か
- 9 特に目立って困難を抱えている分野はどこか、支援の必要な点はどこか。

授業中の様子についての記録

- 10 授業中に他の生徒とどのような関わりを試みたり、持ったりしているか
- 11 授業中に先生とのやりとりはどのような形で行われているか
- 12 その他、授業中の様子として、特に目立った点は何かあるか

三歳健診時における自己記入式の養育者ストレスチェックシートの試作と検討

<目次>

はじめに

1. 調査目的
2. 調査方法
3. 質問紙の作成
4. 結果と考察
 - 4-1 A市の結果
 - 4-2 B町の結果
 - 4-3 C市の結果
 - 4-4 D市の結果
 - 4-5 健診受診後質問紙の結果
 - 4-6 考察
5. 今後の課題

終わりに

はじめに

本報告は北海道大学 子ども発達臨床研究センターのスタッフである田中康雄，内田雅志，久蔵孝幸，福間麻紀，川俣智路，金井優実子によって実施された平成 19 年度障害者自立支援調査研究プロジェクトの中で行われた，三歳健診に関わる調査研究の成果物である。なお本報告書の作成は平成 19 年度のメンバーに，同じくセンターのスタッフである伊藤真理を加えて行った。データの分析は伊藤を中心に行い，報告書作成は川俣を中心に行った。

1. 調査目的

三歳児健康診査（以下三歳健診とする）は，日本の乳幼児の精神保健を支える重要なシステムの 1 つである。近年では各自治体で地域の特色に併せてその内容をアレンジすることも多く見られるが，特に発達障害を発見する場としての意味合いを強くする傾向にある。そのために様々な発達障害の発見のためのチェックリストが開発され，より発達障害を発見する精度は飛躍的に向上していると言えるだろう。

しかし，三歳健診は乳幼児とその保護者の精神保健を支える場であるという点から考えた場合に，三歳健診の質の向上には保護者に対する働きかけの質の向上についても十分に検討する必要があると言える。また，発達障害の発見の精度が向上したために，以前よりも多くの乳幼児が発達障害の疑いがあるとされるため，それに伴い保護者の負担が増加していることも予想される。さらに乳幼児精神保健で発達障害とともに近年問題となっているネグレクトや虐待といった場合には，保護者への働きかけやサポートがなければ状況を改善することが難しいだろう。

本研究はこうした近年の健診の状況を踏まえて，健診時に保護者の支援のために有用なツールを検討することを目的としている。具体的には子育てのストレス，保護者自身のストレス，子育ての環境，健診を受けることへの負担感などをあらかじめ把握できるような自己記入式のチェックリストを試作し，それを予備調査として実際に三歳健診の場で実施することにより，保護者のストレスに焦点を当てることによる保護者支援の意義とそれが健診に与える影響について検討している。

2. 調査方法

調査は 2007 年 12 月から 2008 年 3 月まで，三歳健診を受診する子どもの保護者を対象に行った。調査方法は自己記入式による質問紙調査で，健診受診前と健診受診後にそれぞれ質問紙を実施した（巻末資料 1，巻末資料 2 参照）。設問数は健診受診前質問紙が当てはまるものを選択する形式で 31 問，健診受診後質問紙が 5 件法で回答する方式で 9 問である。調査はスタッフがまず調査について説明し，そこで同意が得られた保護者に健診受診前質

問紙を渡しはその場で記入後回収し、健診受診後質問紙は返送用の封筒を調査協力者に渡し郵送による回収とした。調査は北海道内のA市（人口およそ5万人）、B町（人口およそ2万人）、C市（人口およそ12万人）、D市（人口およそ6万人）で行われている三歳健診の会場で、A市とB町で1回、C市で2回、D市で3回の計7回行った。有効回答数は健診受診前質問紙が221、健診受診後質問紙が92であった。

スタッフは各会場に訪問し、直接健診を受診する養育者に対して質問紙を手渡している。また健診終了後に行われるカンファレンスに出席し、カンファレンスの中で要フォローとなった子どもとその養育者を記録した。ここでの要フォローは、①子どもや養育者に何らかの障害や疾患がありそれを保健師がカンファレンスでふれた、②すでに発達支援センターなどの療育施設につながっており養育者と定期的に連絡をとっている、③以前の健診で経過観察となっている、④健診当日に子どもや養育者自身のことで気になることがあったので後日に電話や訪問などをするようになってい、⑤食習慣などの生活習慣に関して気が付いたことがあり後日指導をすることになっている、の5つの基準のいずれかを満たしている（複数満たしていてもよい）ものを指している。

健診受診前質問紙は都市ごとに集計し、分析を行った。これは健診のスタイルや健診スタッフの専門性が各都市で全く異なるためである。集計は養育者がチェックをつけた設問を1点として、各項目の狙いごとに合計点を出した。分析は全体のデータの項目ごとの分析、フォローなし群とフォローあり群の比較検討を行った。また健診受診後質問紙は回収数が少なかったため、各都市の結果を集計してそれを分析した。

3. 質問紙の作成

健診受診前質問紙は、A 子育てをされていてストレスとなるような子どもの行動の項目、B 保護者自身のストレスの項目、C 子育てに関わるストレスの項目、D 環境から生じるストレスの項目、R 健診への負担感や拒否感の項目の5つの狙いで構成されており、回答者が該当するものを選択する方式とした。これはその場で記入し回収するために、回答方式を簡易化する必要があったからである。1の質問に関してはA1 子どもの過活動に関わる項目とA2 子どもの過緊張に関わる項目に分けることができる。質問項目は全31問で、表1は全質問項目、表2は各質問項目が1から5までのどの項目に該当しているかを示している。

表1

健診受診前質問紙項目

番号	項目
----	----

Q1	幼児期、おとなしかった
Q2	気が散りやすく、ひとつの遊びに集中できない
Q3	知らない人やもの、場所になかなか慣れず時間がかかる
Q4	意味がわからない音や叫び声をだしたりする
Q5	ちろちろしている
Q6	人の話が聞けない
Q7	人がそのもので遊んでいても、目にはいったものだけにとらわれてしまい、つい奪い取ってしまうことがある
Q8	遊びなどの場面で、自分の順番がなかなか待てない
Q9	初めての人に弱い
Q10	不器用である
Q11	子育てを背負わされていると感じる
Q12	地域の中で暮らしにくい面があり、子育てに不安を抱えている
Q13	子育てを行う上で、経済的に苦しい
Q14	子育てに関して困っていることはない
Q15	今日の健診で、子どものことをきちんと見てもらえるか心配である
Q16	自分の子どもと他の子どもを比較しても意味があるとは思えない
Q17	子育ては自分1人でできている
Q18	今日の健診には特に期待していない
Q19	子育てに時間をとられ、自由な時間がない
Q20	子どもの成長は順調である
Q21	今日の健診で、子どもについて何か言われるのではないかと不安である
Q22	育児のことについて人から言われる必要はないと思う
Q23	子育てを手伝ってくれる人が身近にいない
Q24	今日の健診のために、家庭で何か特別な取り組みを行ってきた
Q25	他の子の成長と比べてしまう
Q26	経済面、地域生活、家族のことを相談できる場所や専門家にどういったものがあるかわからない
Q27	子どもや子育てについて気になる点を聞いてみたい
Q28	子どもの成長に不安がある
Q29	子育てについての悩みを相談する相手がいない
Q30	今日の健診で子どもが普段の力を出してくれるか心配である
Q31	今日の健診で、子育てについて何か言われるのではないかと不安である

表 2

各質問項目の狙いの一覧表

項目の狙い		設問番号
A1 子どもの過活動に関わる項目	ストレスとなる子どもの行動	2, 4, 5, 6, 7, 8
A2 子どもの過緊張に関わる項目		1, 3, 9, 10
B 保護者自身のストレスの項目		11, 19, 23, 25, 28, 29
C 子育てに関わるストレスの項目		15, 21, 24, 27, 31
D 環境から生じるストレスの項目		12, 13, 26, 30
R 健診への負担感や拒否感の項目		14, 16, 17, 18, 20, 22

A1 と A2 に関しては厚生労働科学研究費補助金で行われた「発達障害（広汎性発達障害，ADHD，LD 等）に係わる実態把握と効果的な発達支援手法の開発に関する研究（主任研究者：市川宏伸）」にて実施された養育者が抱えている子育てにおけるストレス調査の結果を参考に作成した。このストレス調査は保護者にストレスと感じる子どもの行動について調査したもので、その結果子どもの過活動的な行動と過緊張的な行動が特に保護者にとってストレスであることが明らかとなったものである。B と C と D に関しては、スタッフがそれぞれ該当する意見を出し、検討を重ねて作成した項目である。

健診に対してモチベーションが低い、あるいは否定的な保護者は質問紙へのモチベーションも低くなり、該当項目があっても選択しない可能性が考えられる。しかしこうした健診に対してモチベーションが低い、あるいは否定的な保護者でも、その後の子育てにフォローが必要であることが少なくはない。そこで R の項目ではあえて子どもの成長を協調するような項目、健診に対して否定的な項目、子育てへの他人の干渉を拒むような項目を作成した。従ってこの項目のみが多く選択された保護者は、健診に対して前向きではない群として考えられることができることになる。

健診受診後質問紙は、主に健診を実際に受診しての内容や対応への満足度、保護者自身のストレス軽減の効果の有無、健診の内容を今後どれくらい活用できるか、などについて 5 件法で質問する形になっている。表 3 は質問項目の一覧および、その質問項目の狙いである。

表 3

健診受診後質問紙の質問項目

番号	質問項目	項目の狙い
1	3歳健診に満足している	健診への満足度
2	お子さんの育ちに関して保健師から説明がなされた	発達に関する理解
3	子育てに関して保健師から説明がなされた	子育て支援
4	今後のお子さんへの対応について保健師から説明がなされた	今後の見通し
5	健診を受けて、子育てに関するストレスが軽減した	養育者のストレス
6	健診を受けて、ご自身に関わるストレスが軽減した	養育者のストレス
7	健診を受けて、お子さんの育ちについての理解が深まった	発達に関する理解
8	健診の内容を家族や近しい人に伝えたい	子育て支援
9	健診の内容を実際に子育てに役立てるのは難しいと思う	今後の見通し

4. 結果と考察

4-1 A市の結果

図1から図8はA市の結果を表すグラフである。

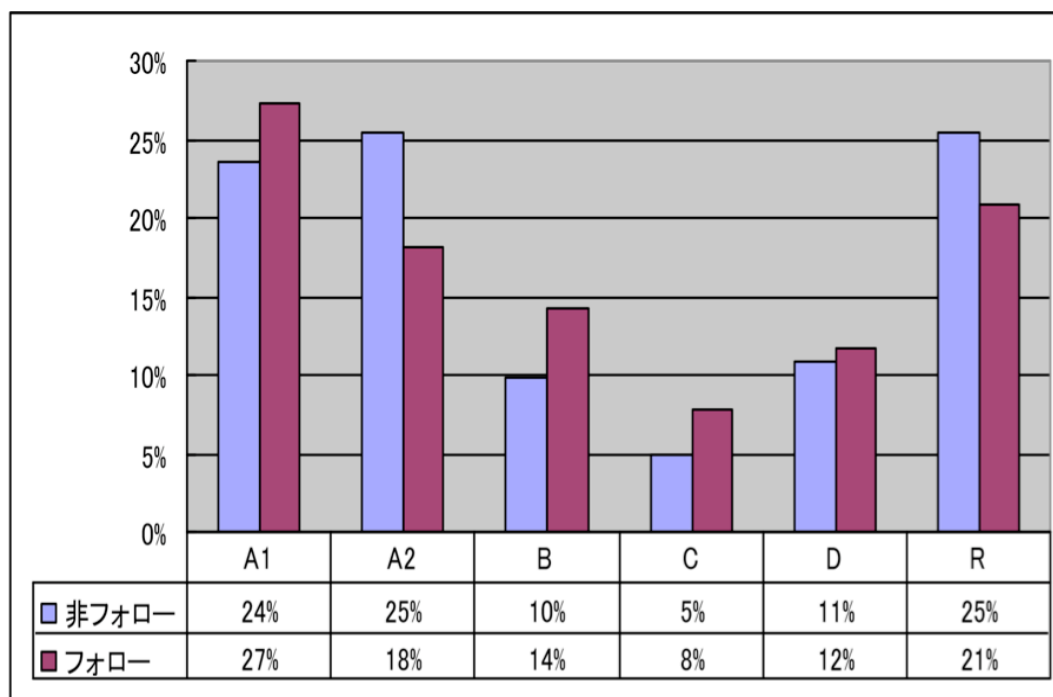


図1 A市 系統計

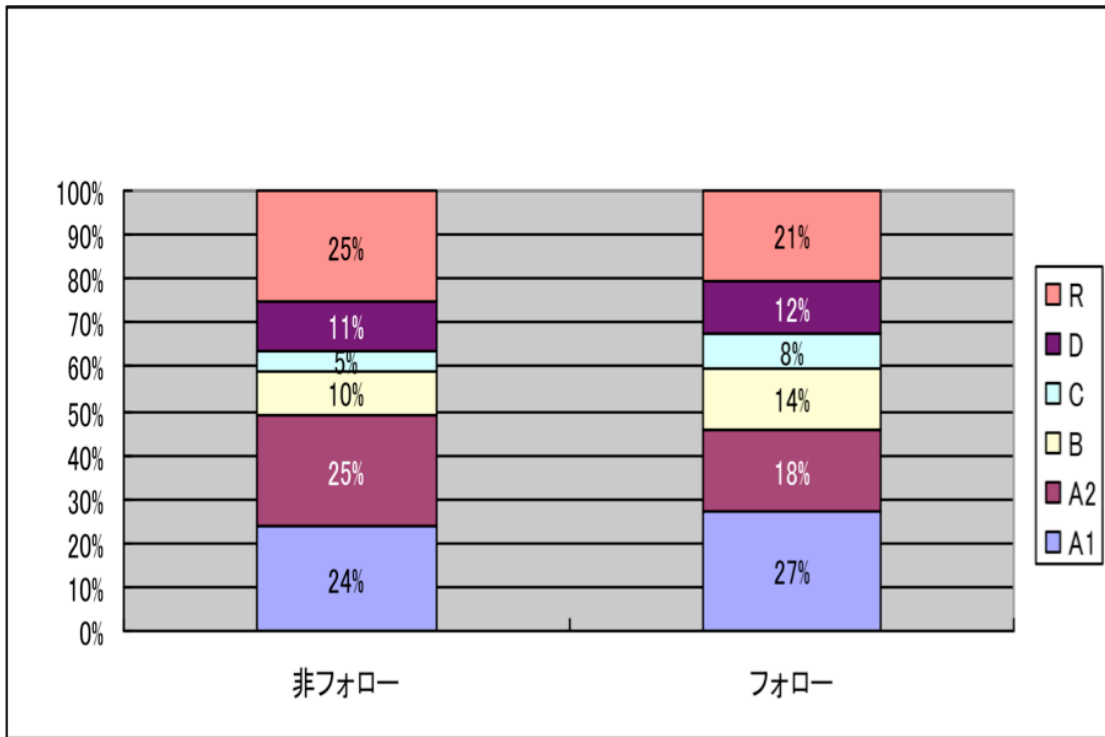


図2 A市 系統計比較

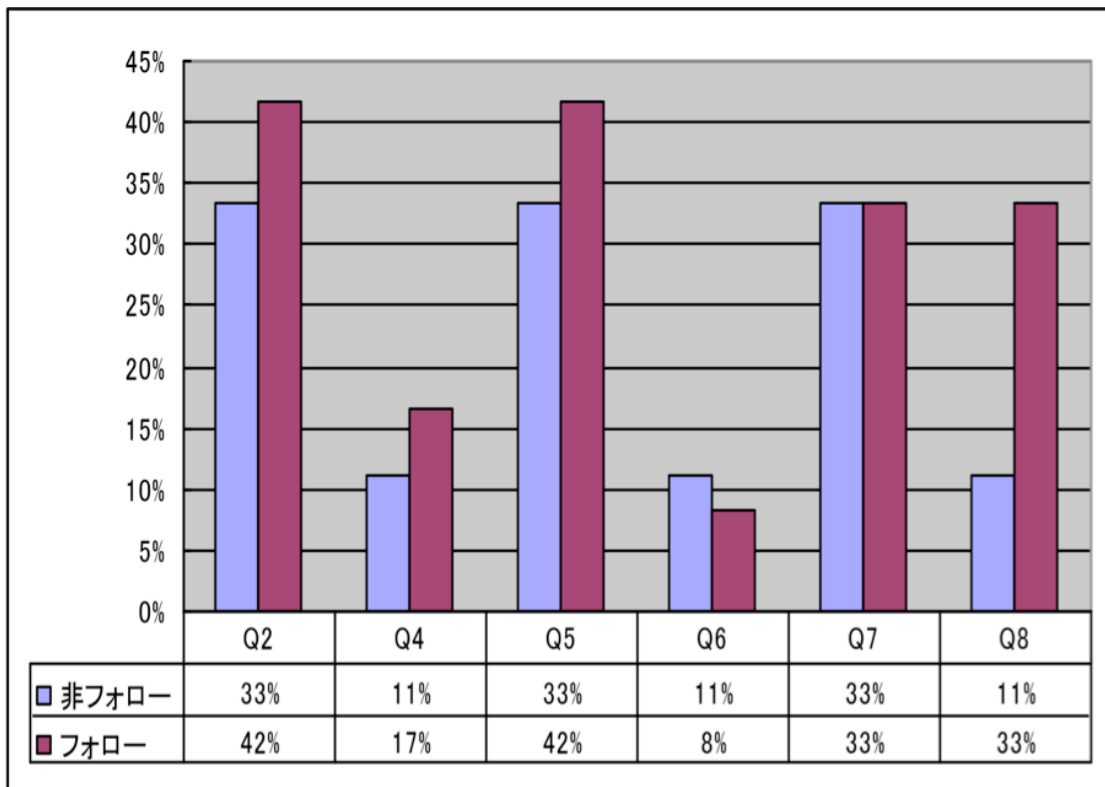


図3 A市 A1

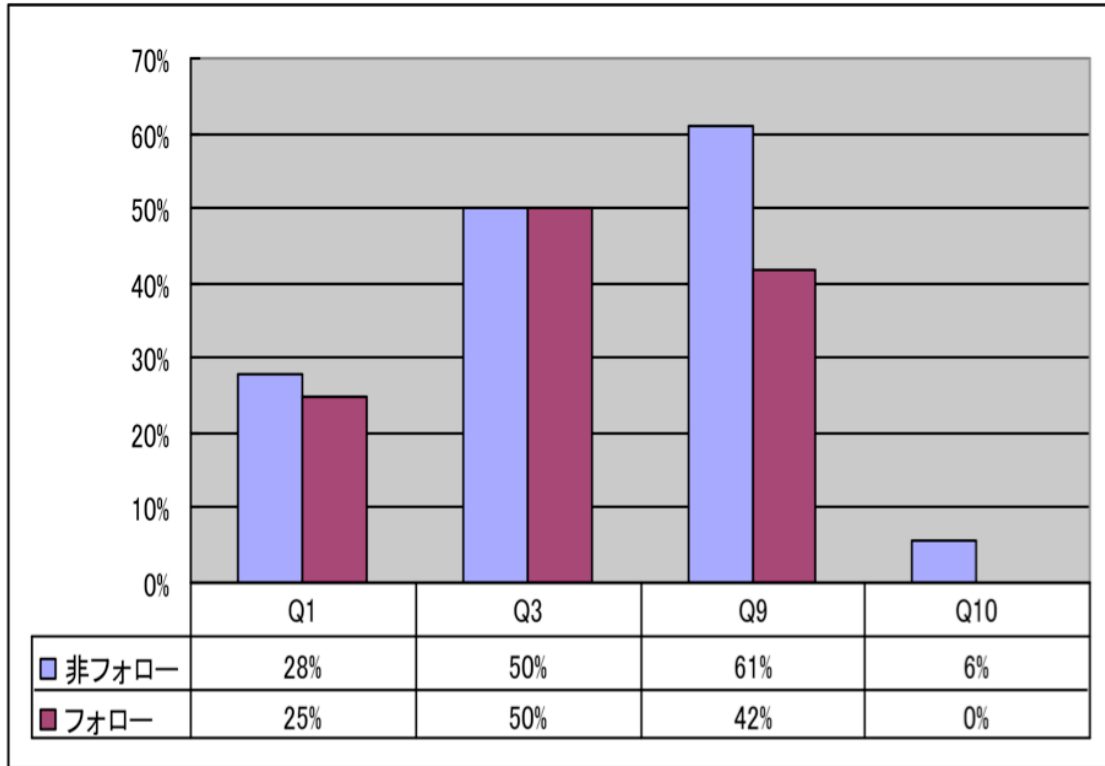


図4 A市 A2

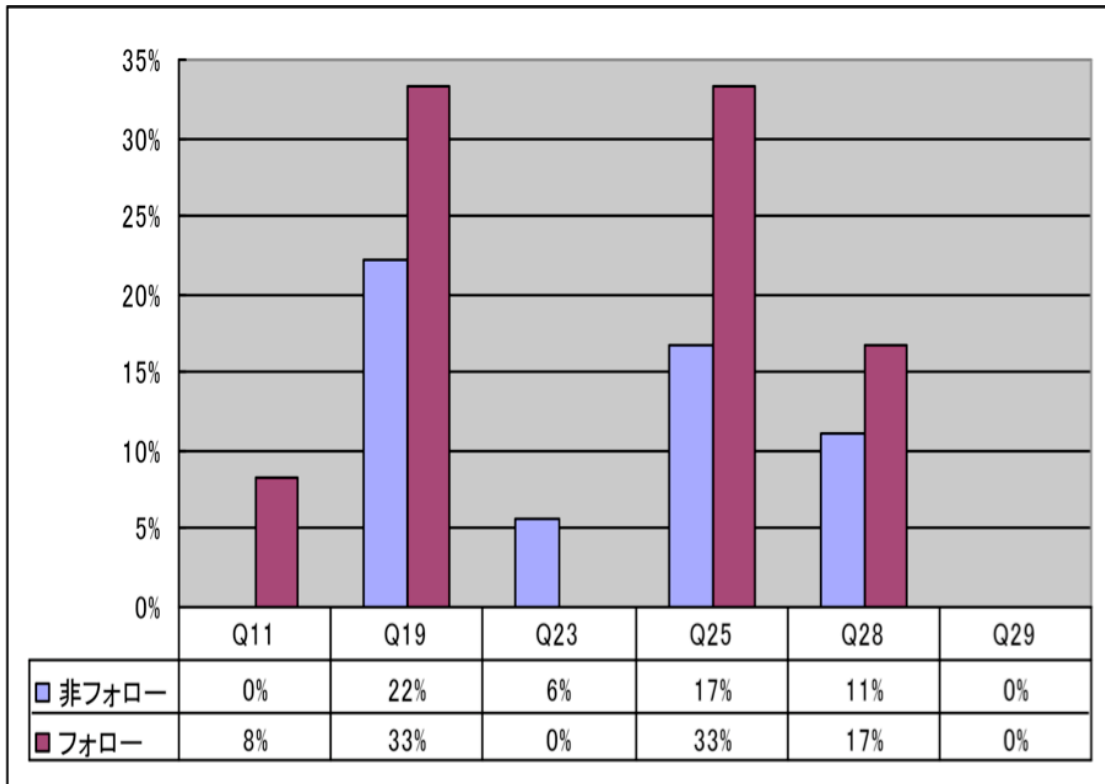


図5 A市 B

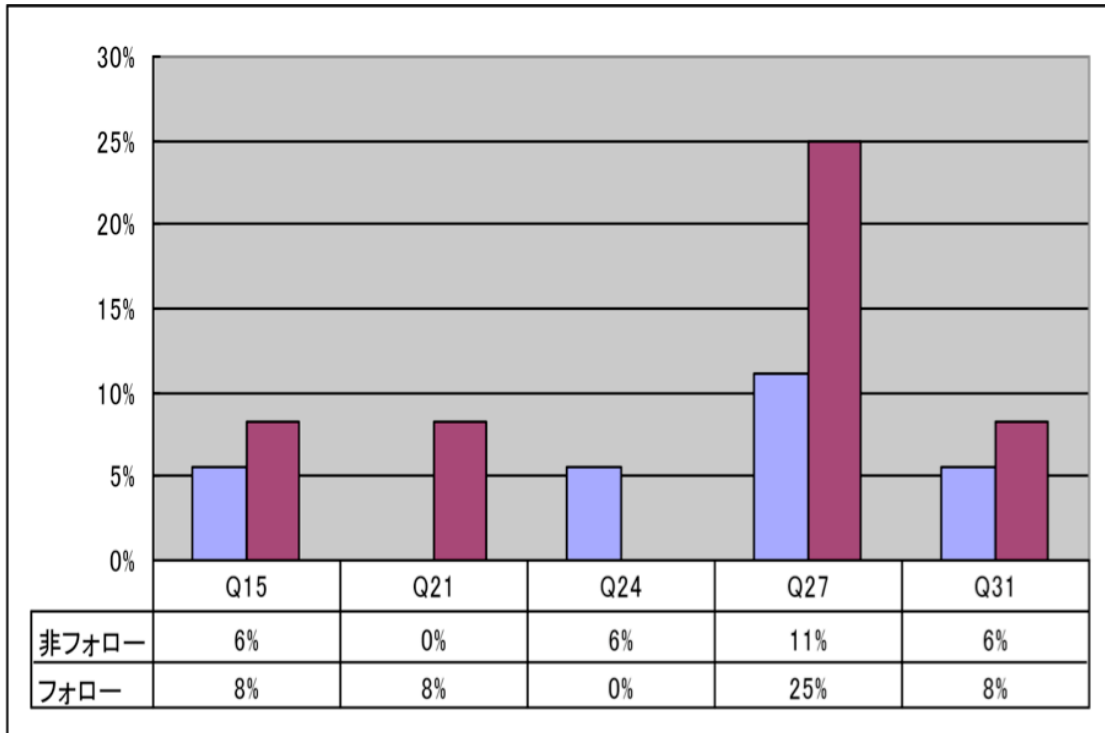


図6 A市 C

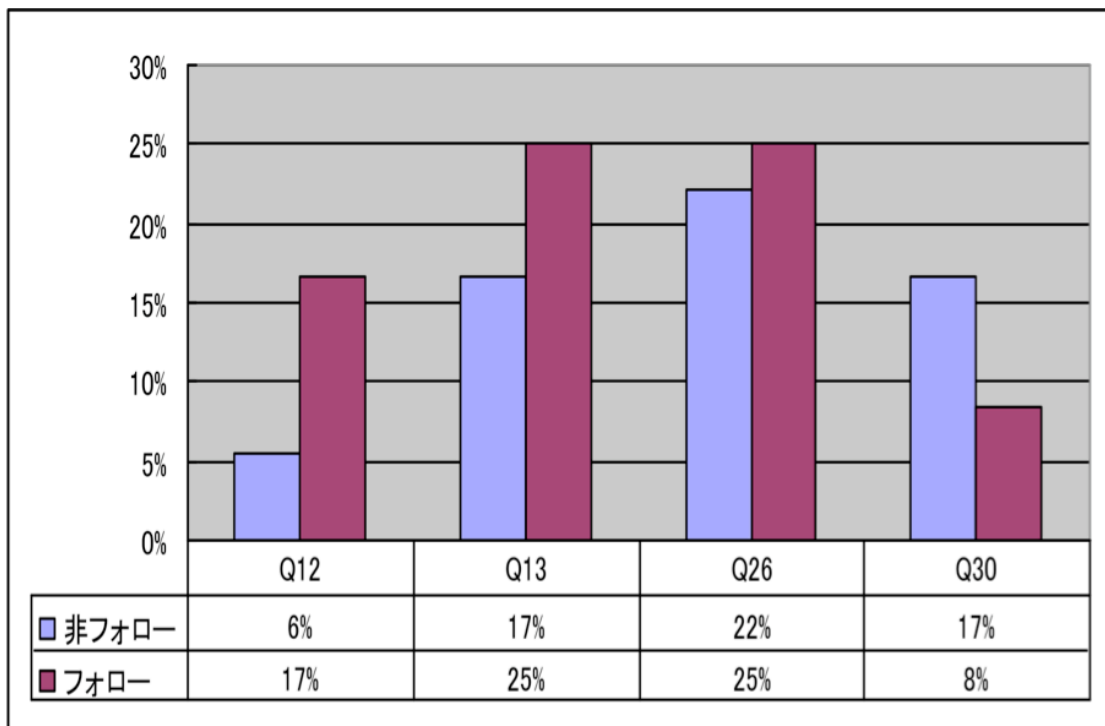


図7 A市 D

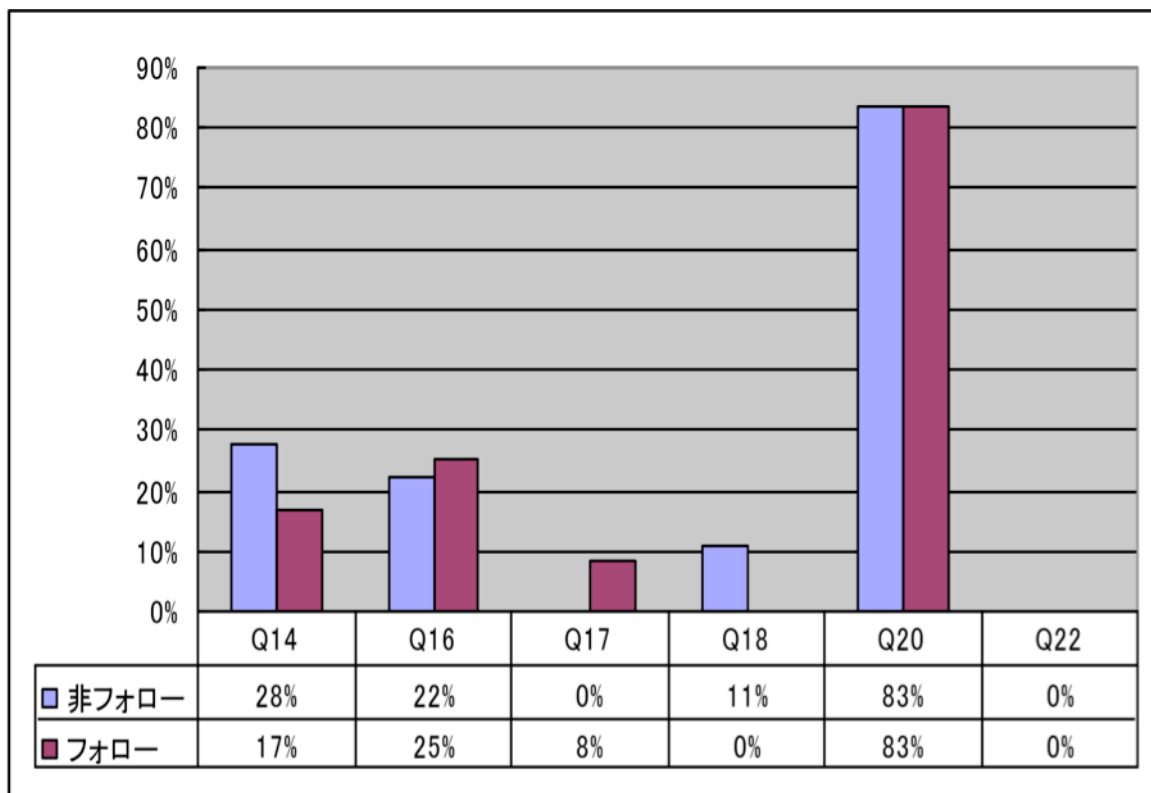


図8 A市 R

実数30人中フォロー対象者12人(約40%)であった。以下、フォロー対象者をフォロー群、フォロー非対象者を非フォロー群とする。A1(過活動性)はフォロー群が3ポイント多かった。A2(過緊張性)は非フォロー群が7ポイント多かった。B(養育ストレス)はフォロー群が4ポイント多かった。C(保護者ストレス)はフォロー群が3ポイント多かった。D(環境ストレス)はフォロー群が1ポイント多かった。R(拒否)は非フォロー群が4ポイント多かった。

アンケート質問項目全31項目の平均点は、フォロー群が平均6.4点で非フォロー群が平均5.7点であった。フォロー群および非フォロー群は今回の質問項目にはほぼ同数のチェックをしている。今回の結果では、両群ほぼ同数のチェックしている結果となった。A2(過緊張)及びR(拒否)に関しては非フォロー群が高い結果となった。このことは健診において、過緊張傾向の子どもの行動にストレスを感じている保護者、健診に対して非協力的な姿勢の保護者の中で、支援の必要な保護者の一部が見落とされている可能性があることを示している。

個別の質問の結果からは次のような特徴が見出せた。Q11「子育てを背負わされていると感じる」Q17「子育ては自分一人できている」はフォロー群のみチェックしている。

これはフォロー群の保護者の子育てに関する孤独感が表れていると考えられる。しかしQ23「子育てを手伝ってくれる人は身近にいない」では非フォロー群のみがチェックしている。これはフォロー群が必ずしも子育てを手伝ってくれる人がいないわけではないにもかかわらず、孤独感を感じていると推察できるだろう。Q25「他の子の成長と比べてしまう」ではフォロー群はほぼ倍の数がチェックしQ21「健診で子どもについてなにか言われるのではないかと不安である」はフォロー群のみであった。これは子どもが支援の対象となっているフォロー群の、子どもの成長に対する不安を反映していると考えられる。またQ24「健診のために何か特別な取り組みを行ってきた」は非フォロー群のみであり、Q18「健診には特に期待していない」も非フォロー群がチェックしている。これは非フォロー群が健診に対して否定的な側面をもっていることを示唆している。反面Q27「子どもや子育てについて気になる点を聞いてみたい」ではフォロー群は倍以上の数がチェックしている。

実数が少ないため、割合でその傾向をみることはできないが、両群ともに質問項目にチェックする数の平均がほぼ同じであり、また、子どもの様子（過活動・過緊張）と同様に拒否が高い結果となっている。

4-2 B町の結果

図9から図16はB町の結果を表すグラフである。

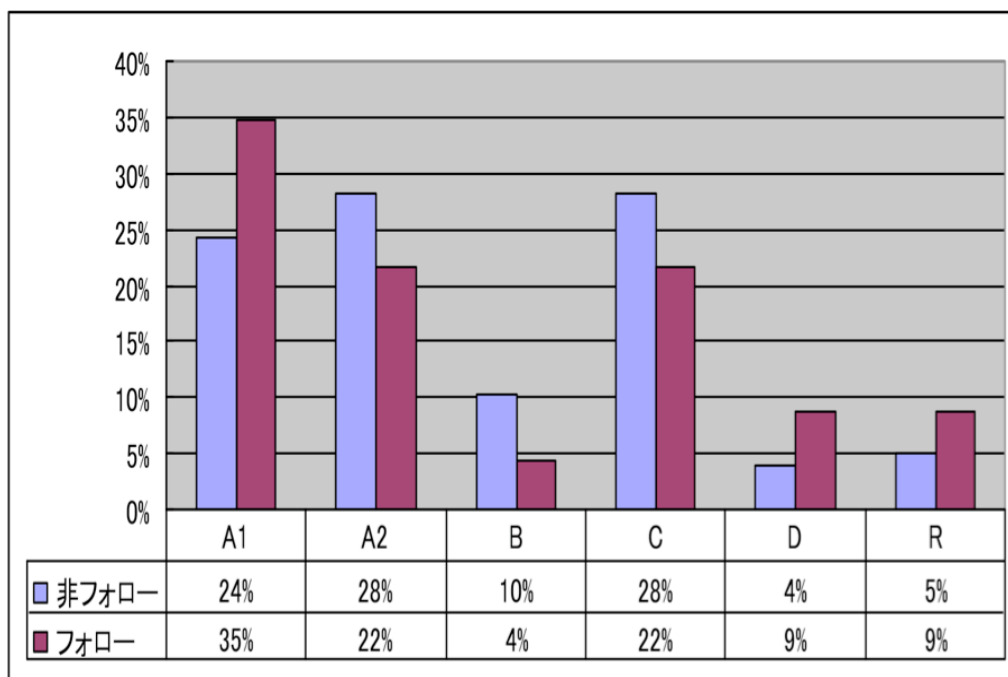


図9 B町 系統計

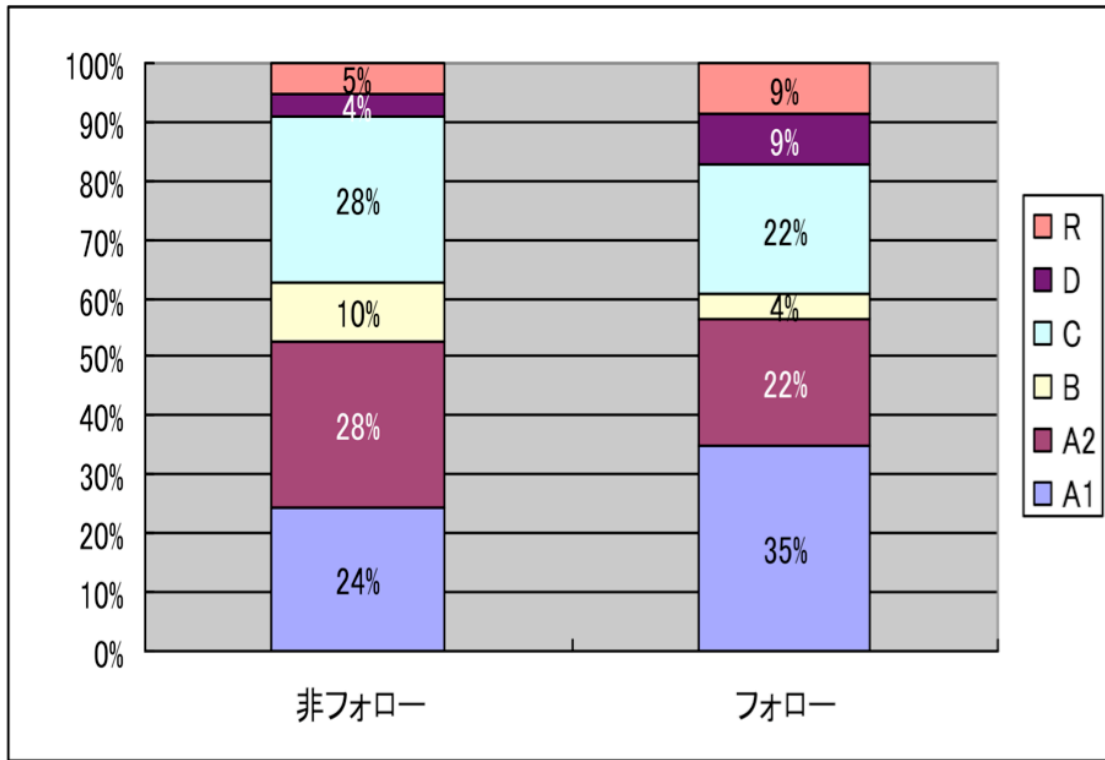


図10 B町 系統計比較

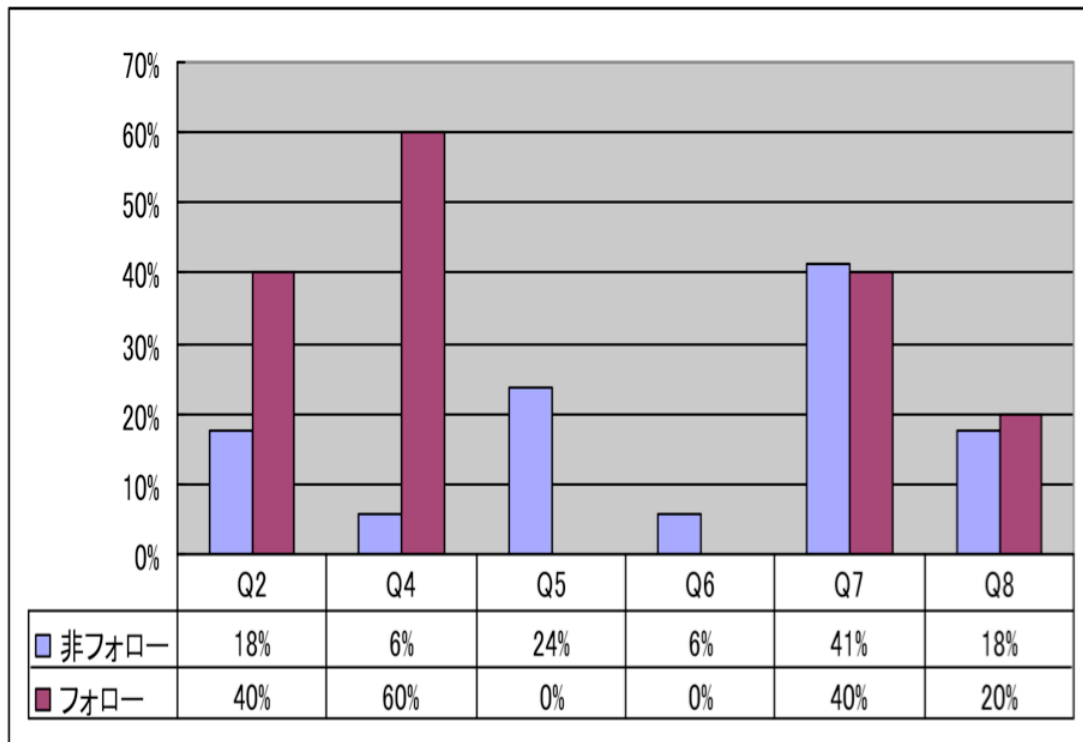


図11 B町 A1

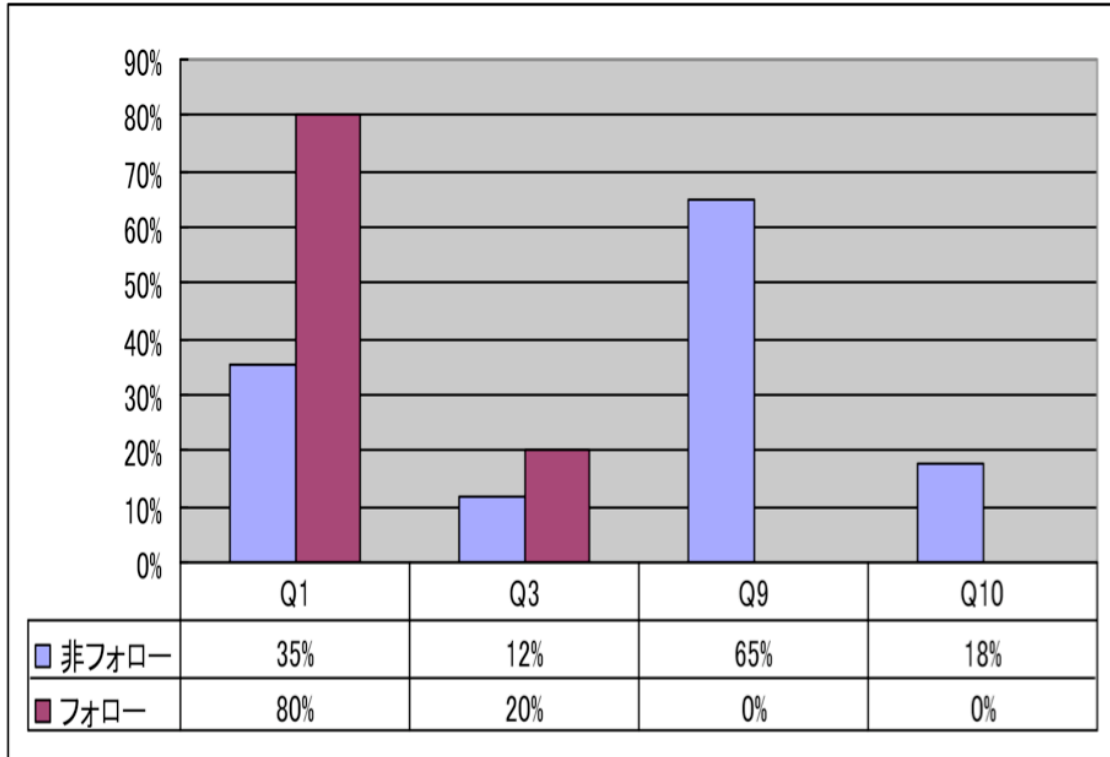


図12 B町 A2

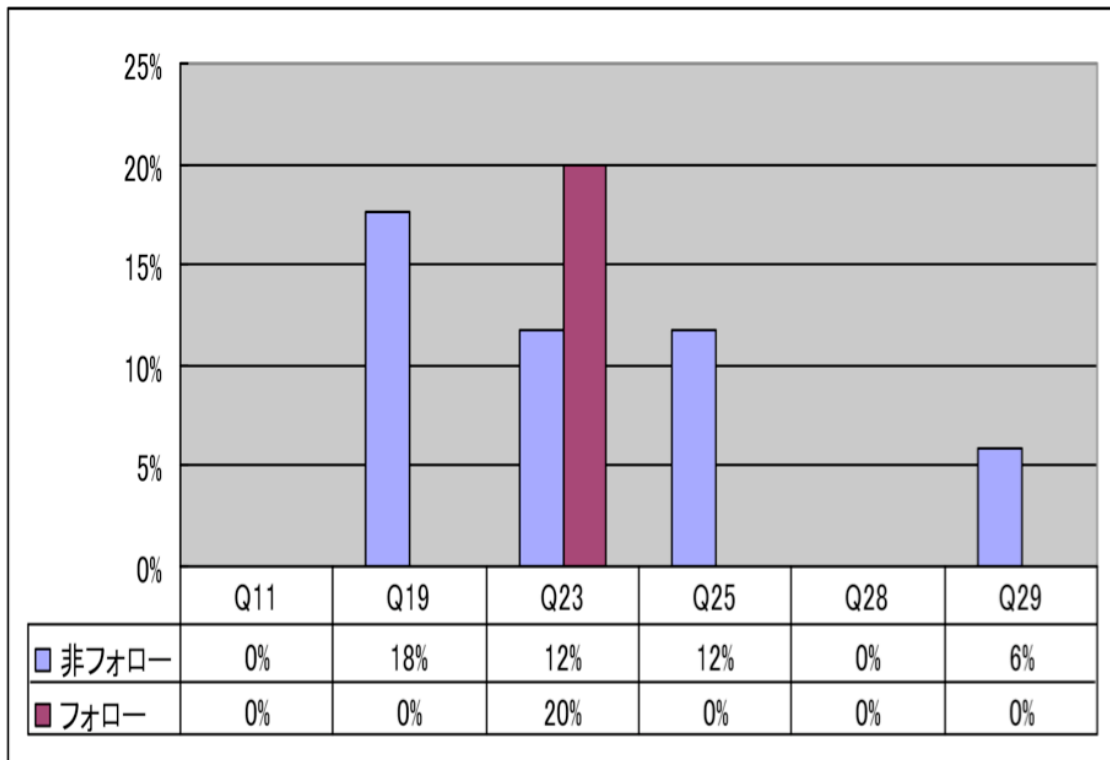


図13 B町 B

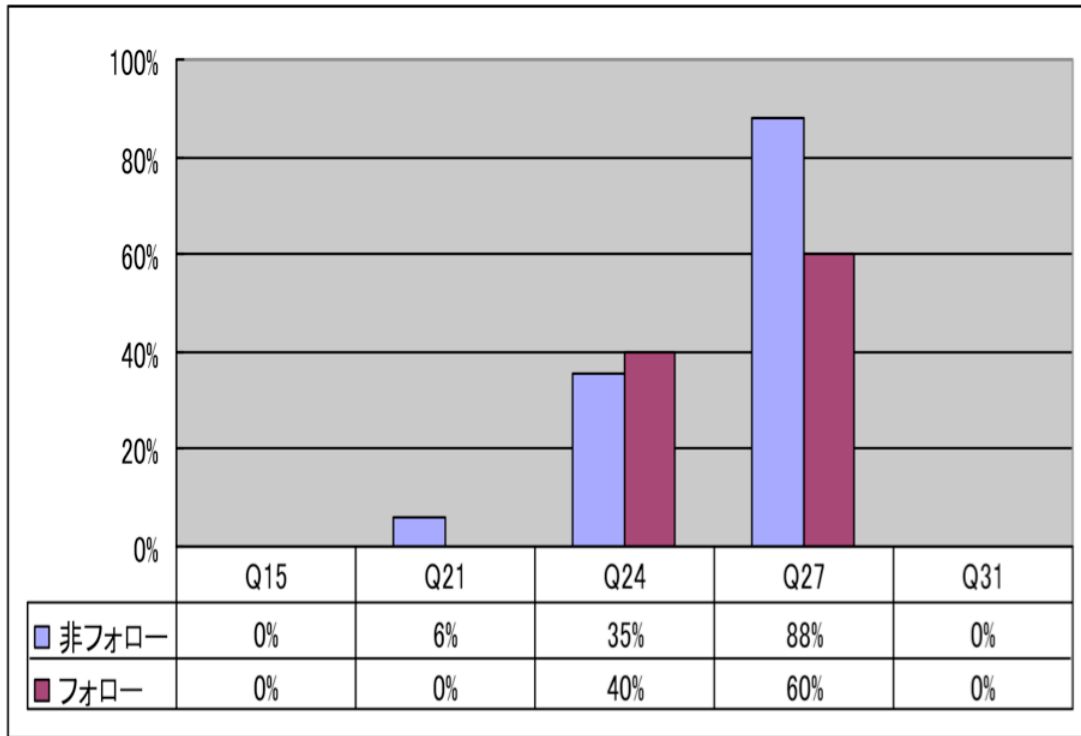


図14 B町 C

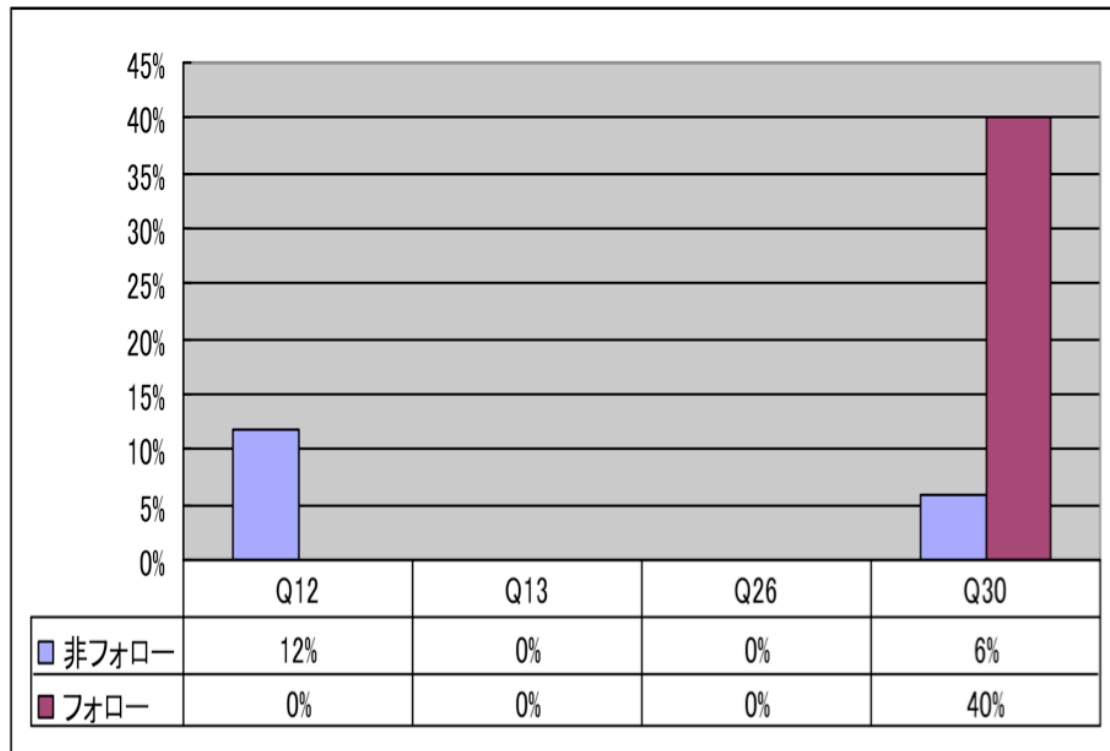


図15 B町 D

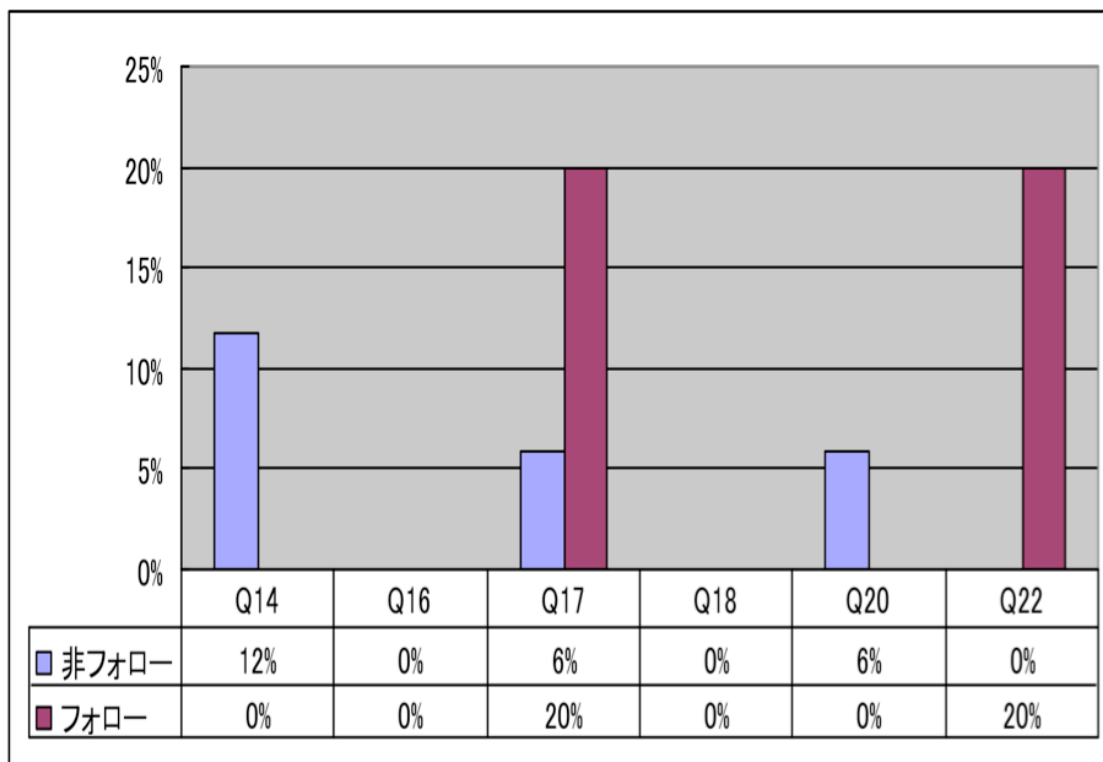


図16 B町 R

実数22人中フォロー対象者5人(約23%)であった。以下、フォロー対象者をフォロー群、フォロー非対象者を非フォロー群とする。A1(過活動性)はフォロー群が11ポイント多かった。A2(過緊張性)は非フォロー群が6ポイント多かった。B(養育ストレス)は非フォロー群が6ポイント多かった。C(保護者ストレス)は非フォロー群が6ポイント多かった。D(環境ストレス)はフォロー群が5ポイント多かった。R(拒否)はフォロー群が1ポイント多かった。

アンケート質問項目全31項目の平均点は、フォロー群、非フォロー群ともに平均4.6点であった。今回の結果では、両群間に差はみられない結果となった。また、A2(過緊張) B(子育てストレス)及びC(保護者ストレス)に関しては非フォロー群が高い結果となった。

個別の質問の結果からは次のような特徴が見出せた。Q5「ちょろちょろしている」Q9「初めての人に弱い」Q10「不器用である」は非フォロー群が高い結果であった。Q19「子育てに時間が取られ自分の時間がない」Q25「他の子の成長と比べてしまう」についても非フォロー群が高い結果であった。これは非フォロー群に子育てに時間を割けないことへの不安や、成長への不安が存在していることを示していると考えられる。またQ30「健診で子どもが普段の力を出してくれるか心配である」はフォロー群が6倍以上の数であった。これはフォロー群の健診へのストレスを示すものであると考えられる。このように両

群の平均点は同点であるが、質問項目の一部には大きな差がみられている。

4-3 C市の結果

図 17 から図 24 はC市の結果を表すグラフである。

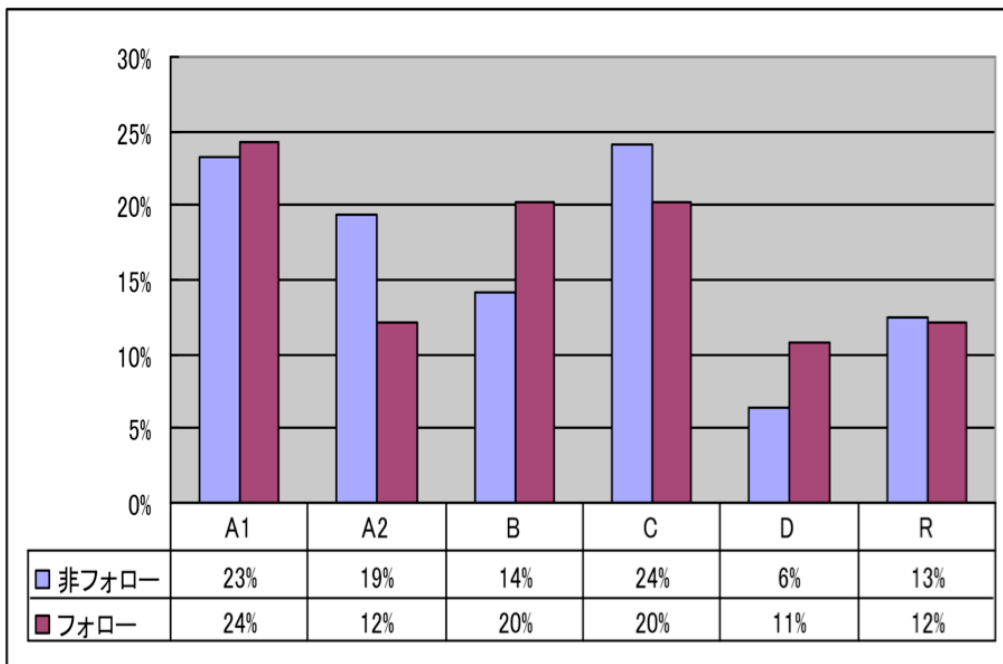


図17 C市 系統計

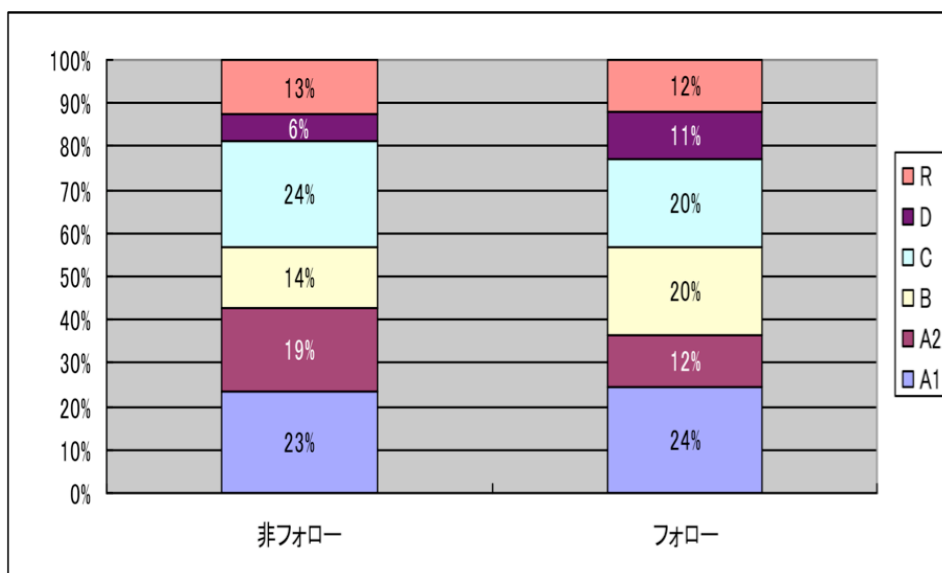


図18 C市 系統計比較

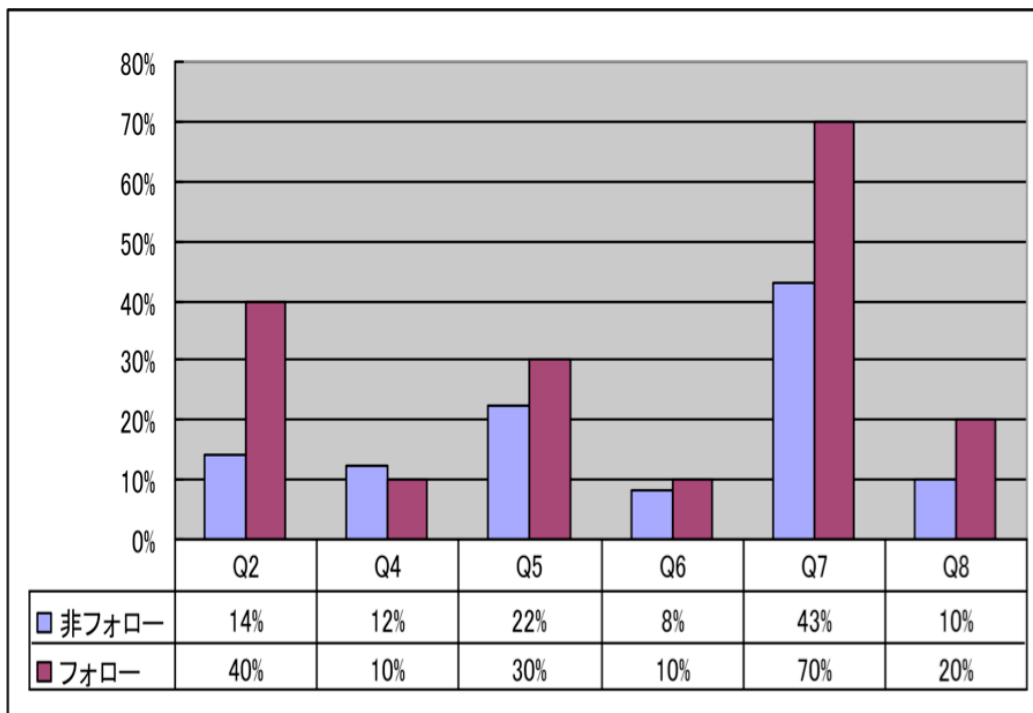


図19 C市 A1

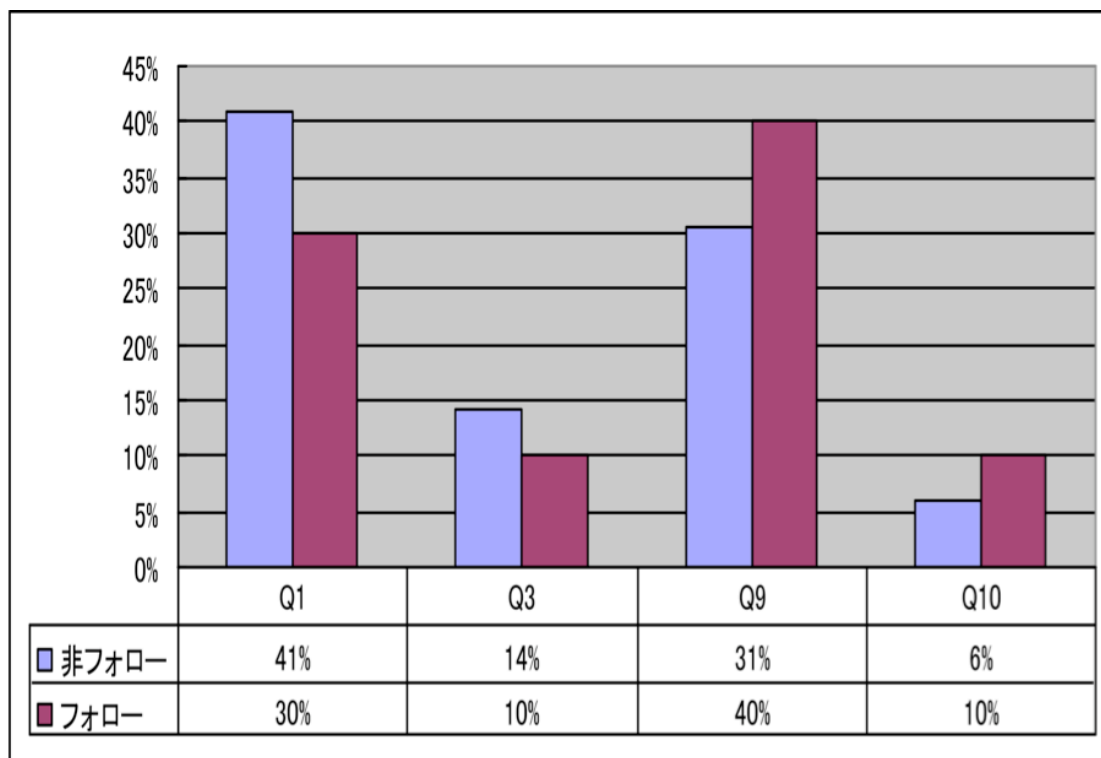


図20 C市 A2

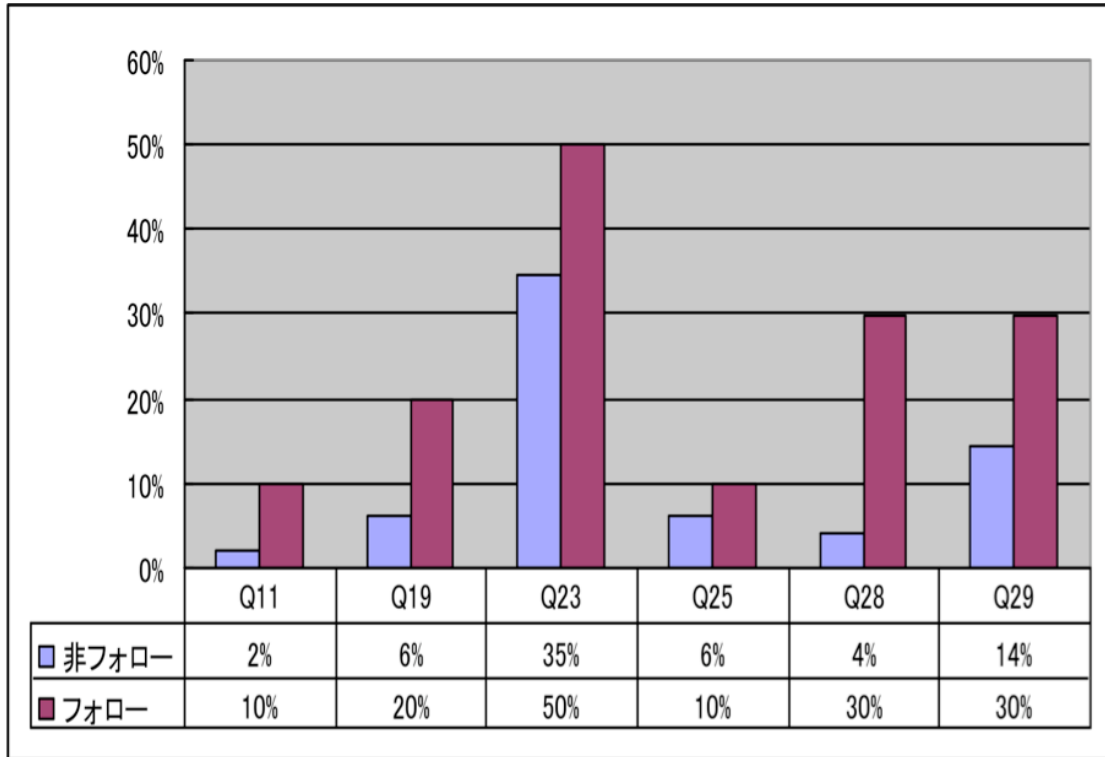


図21 C市 B

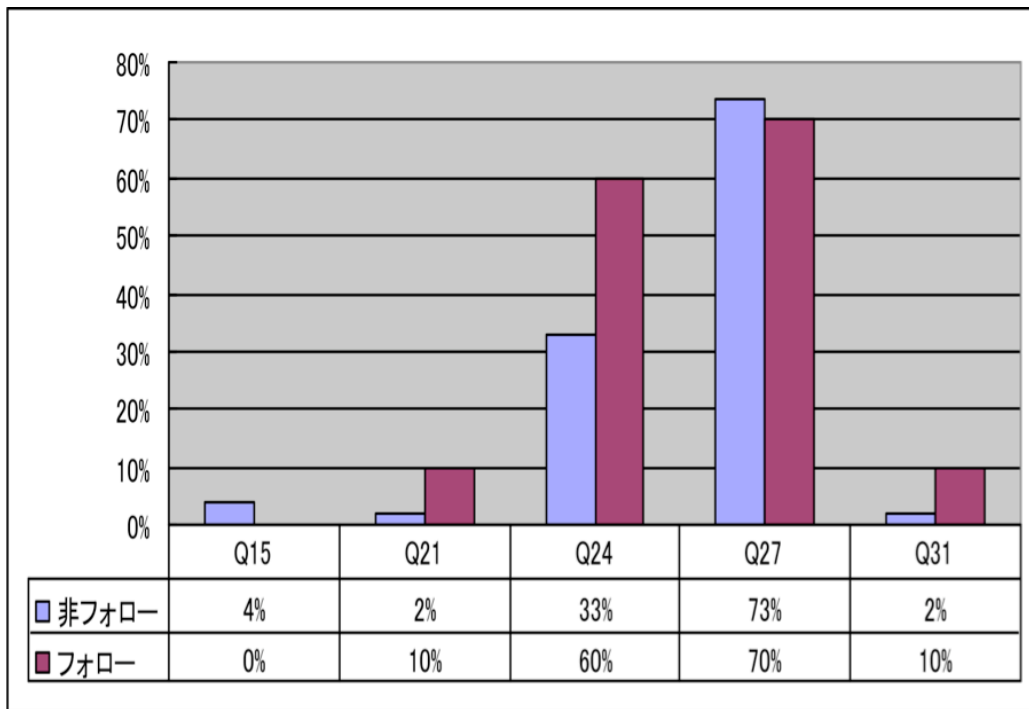


図22 C市 C

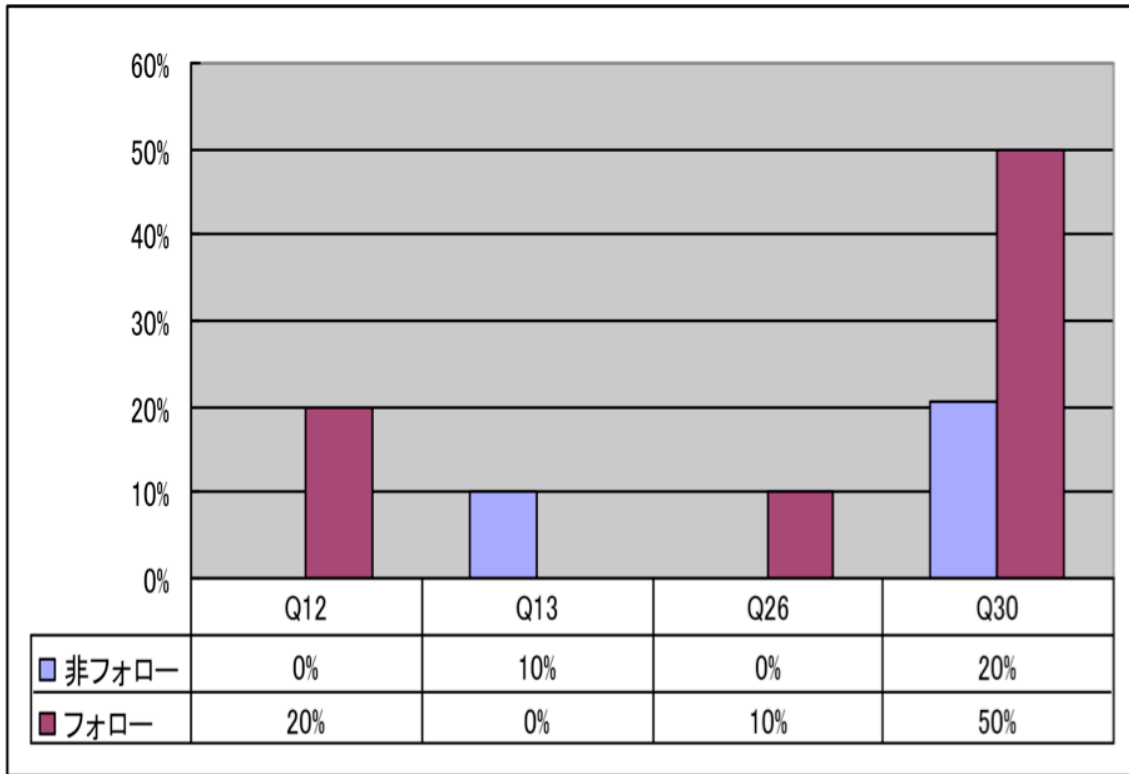


図23 C市 D

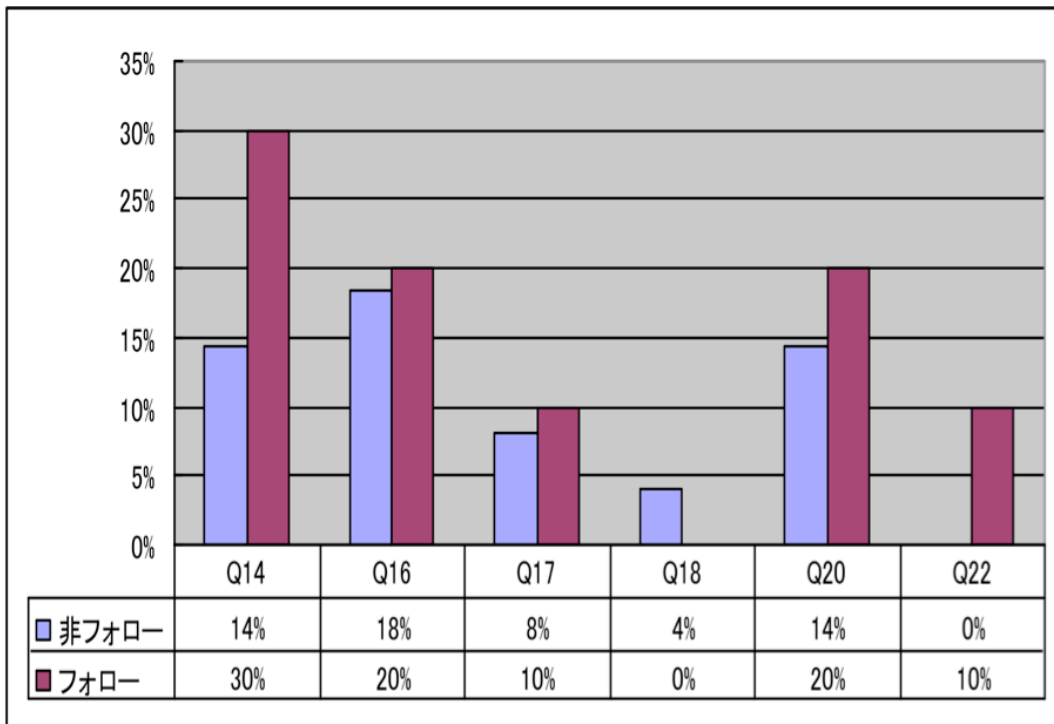


図24 C市 R

実数 59 人中フォロー対象者 10 人（約 17%）であった。以下、フォロー対象者をフォロー群、フォロー非対象者を非フォロー群とする。A 1（過活動性）はフォロー群が 1 ポイント多かった。A 2（過緊張性）は非フォロー群が 7 ポイント多かった。B（養育ストレス）はフォロー群が 6 ポイント多かった。C（保護者ストレス）は非フォロー群が 4 ポイント多かった。D（環境ストレス）はフォロー群が 5 ポイント多かった。R（拒否）は非フォロー群が 1 ポイント多かった。アンケート質問項目全 31 項目の平均点はフォロー群が平均 7.4 点で非フォロー群平均 4.7 点であった。これは非フォロー群に比しフォロー群は今回の質問項目に約 3 項目多くチェックしていることになる。今回の結果では、フォロー群はアンケート項目をより多くチェックしている結果となった。また個別の質問項目別に割合もフォロー群がより多くチェックしていた。これは、子どもの育ちへの不安が反映されフォロー群は全体的に得点が高くなっていると推察される。しかし、C（保護者ストレス）及び R（拒否）に関しては非フォロー群が高い結果となった。

個別の質問の結果からは次のような特徴が見出せた。Q29「子育てについて悩みを相談する相手がない」はフォロー群が非フォロー群の倍の割合でチェックし、Q28「子どもの成長に不安がある」では 7 倍以上の割合でチェックしている。これは、子どもの育ちへの不安が反映されていると考えられる。さらに Q24「健診のために家庭で何か特別な取り組みを行ってきた」ではフォロー群はほぼ倍の割合でチェックし、Q30「健診で子どもが普段の力を出してくれるか心配」にフォロー群は 2.5 倍チェックがあった。ここから子どもの育ちへの不安が、健診を受診することのストレスを高くしていることが読み取れる。また Q14「子育てに関して困っていることはない」で 2 倍のフォロー群がチェックしており、ここでも健診へのストレスが読み取れる。その上で Q27「子どもや子育てについて気になる点を聞いてみたい」では両群ともに 7 割以上がチェックしており、C 市の健診への期待の高さも読み取れるだろう。

4-4 D 市の結果

図 25 から図 32 は D 市の結果を表すグラフである。

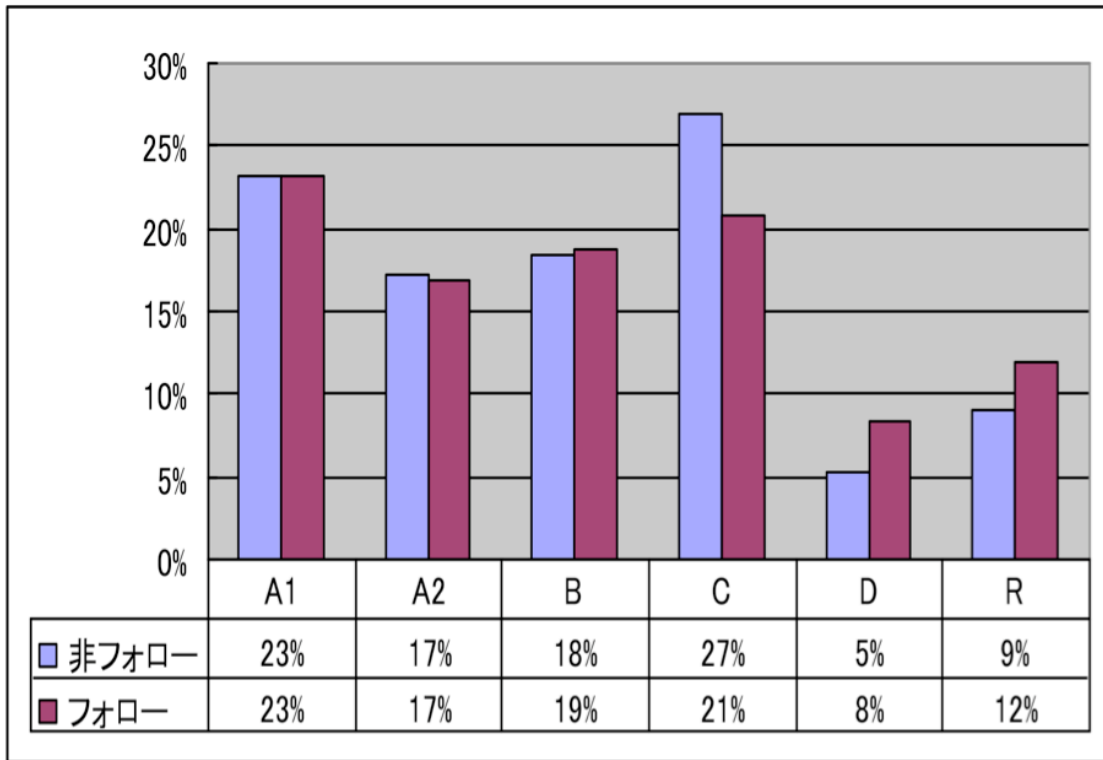


図25 D市 系統計

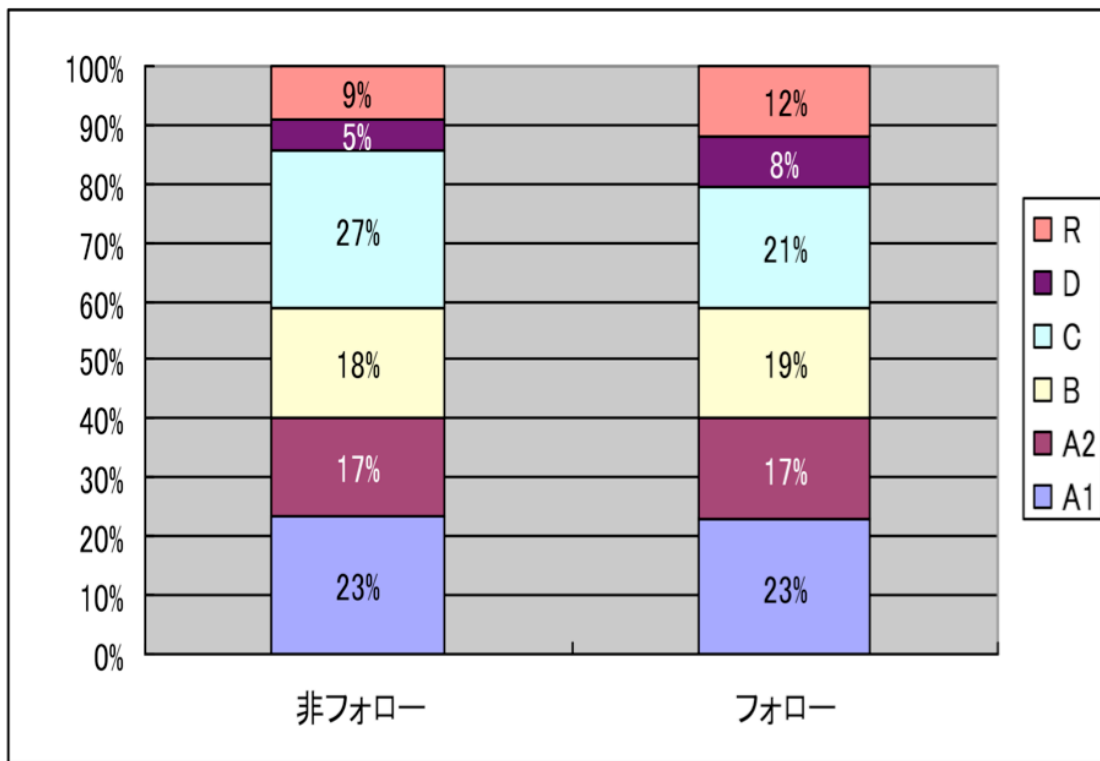


図26 D市 系統計比較

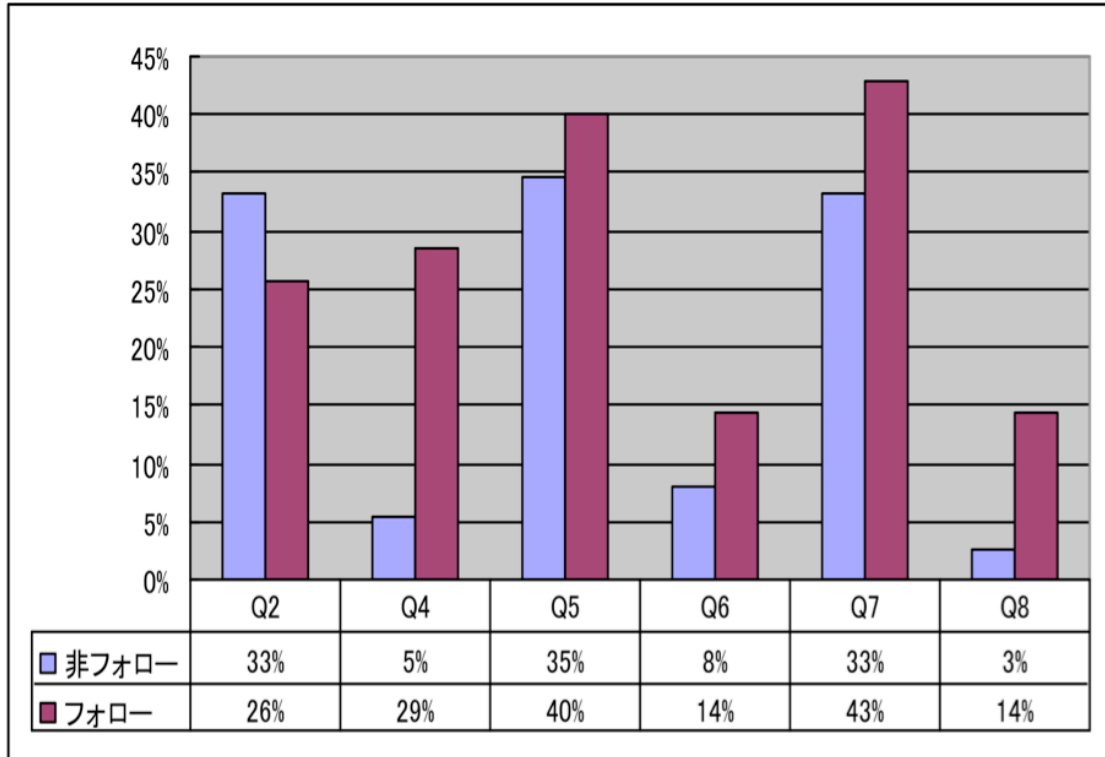


図27 D市 A1

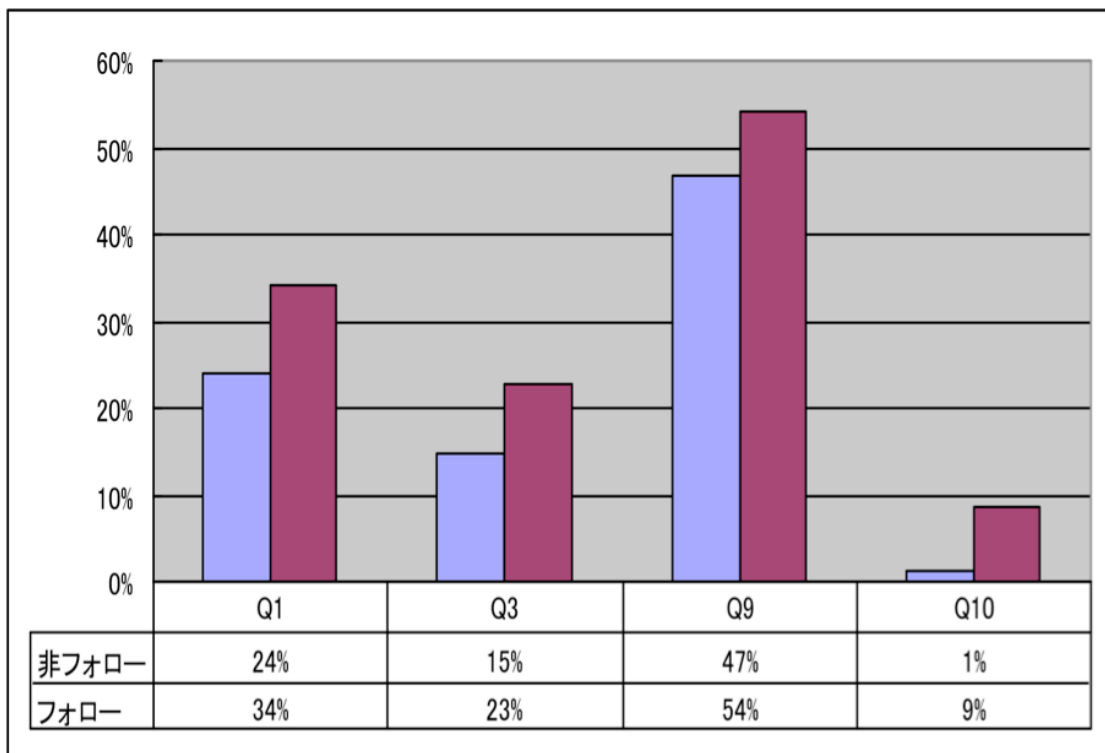


図28 D市 A2

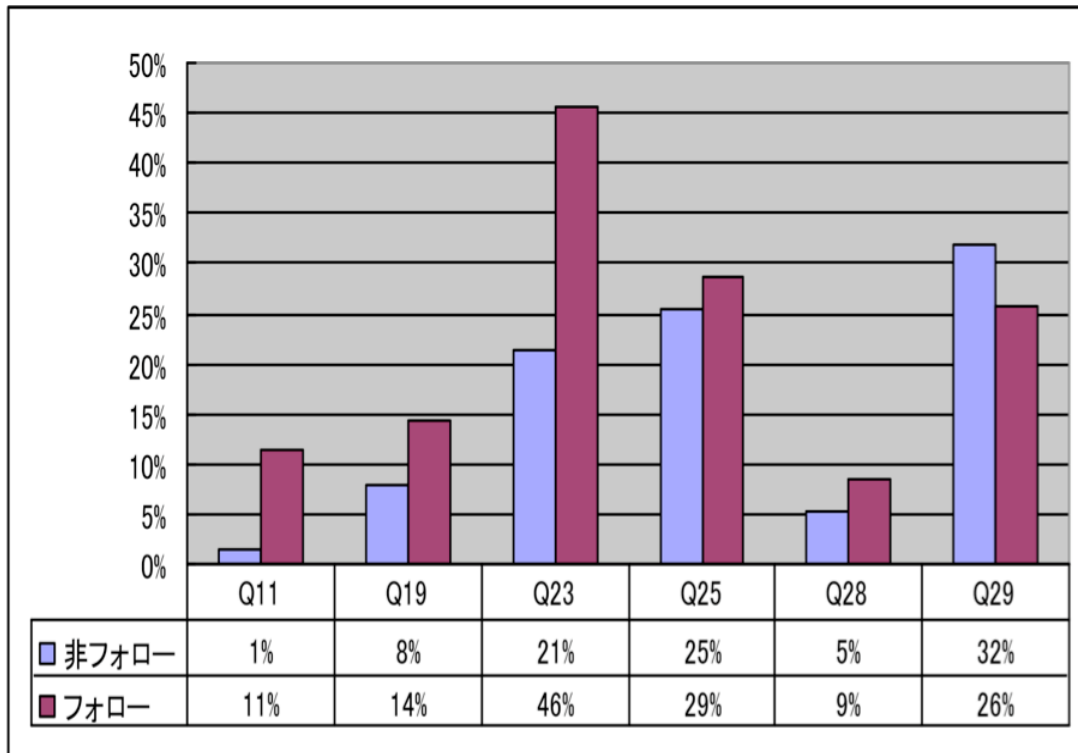


図29 D市 B

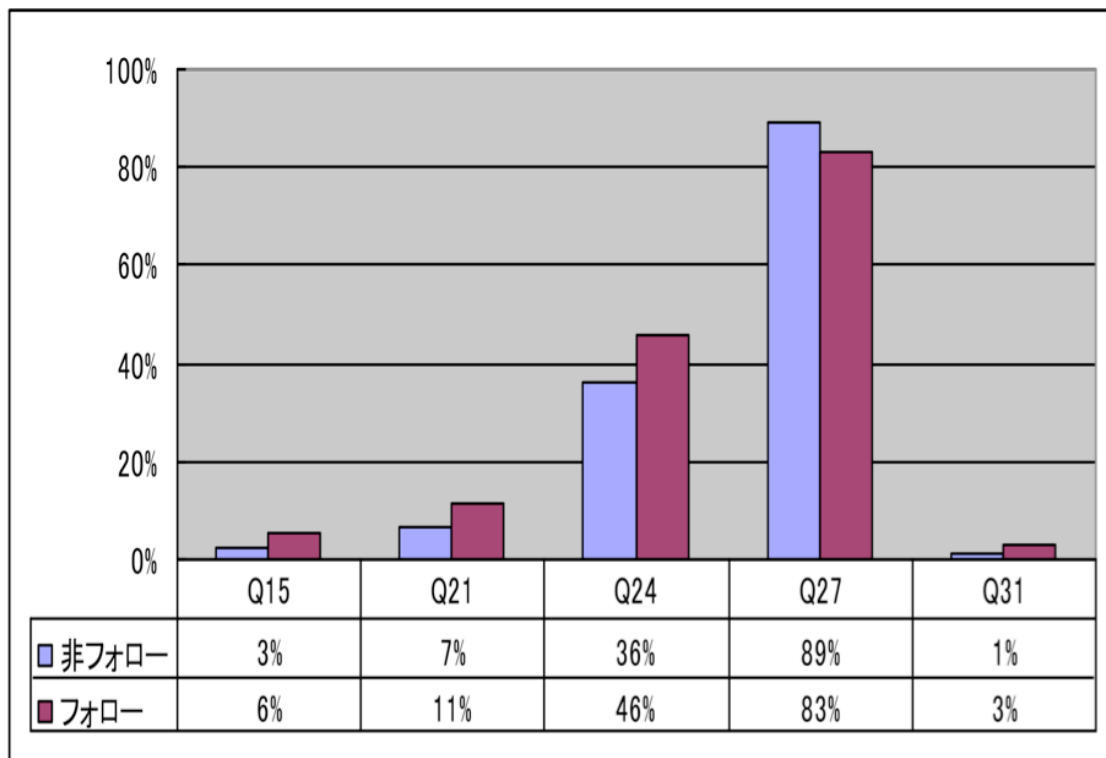


図30 D市 C

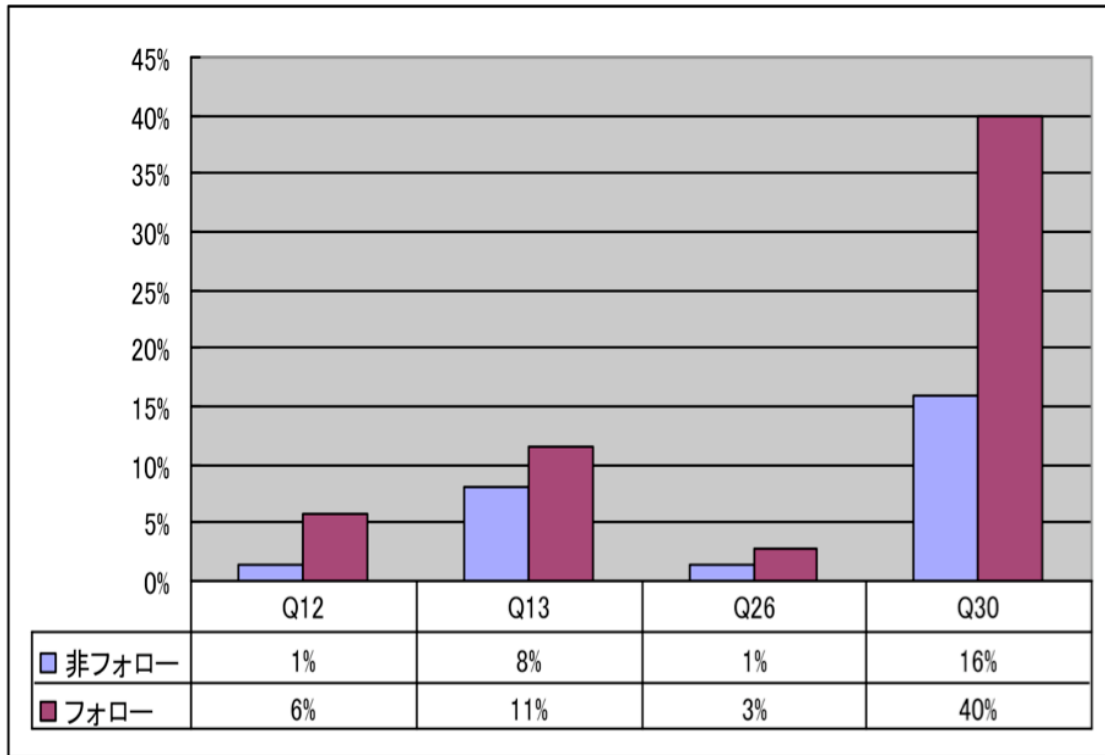


図31 D市 D

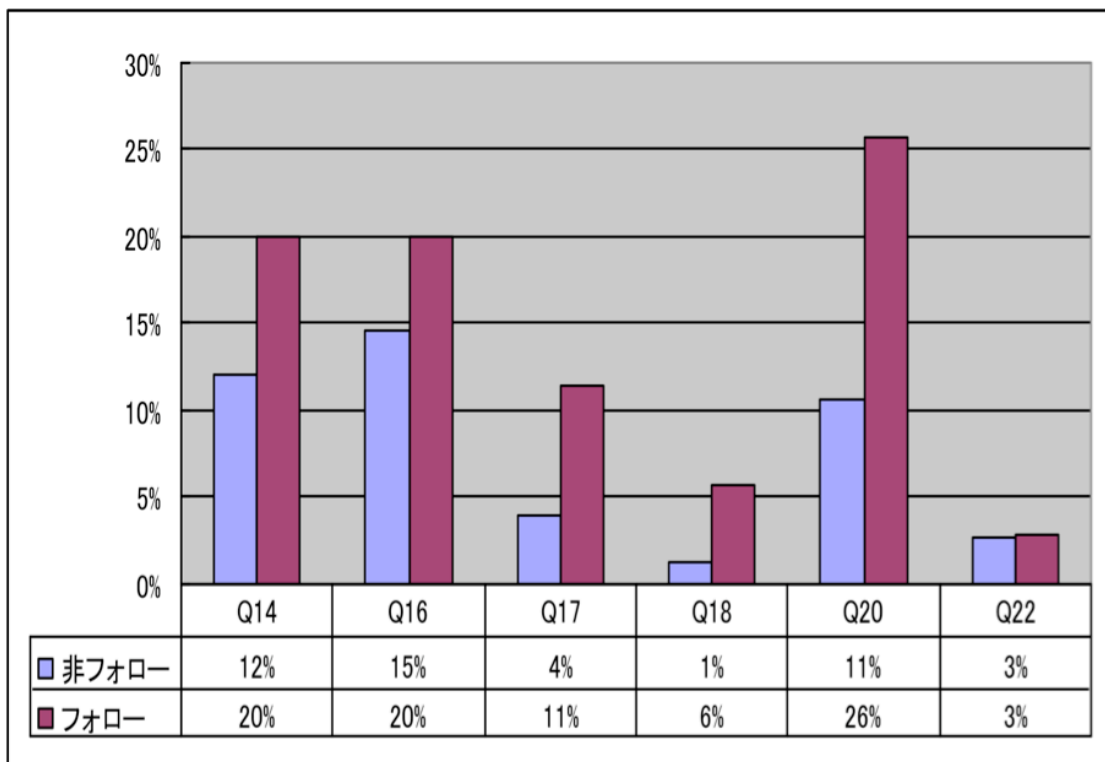


図32 D市 R

実数 110 人中フォロー対象者 35 人（約 32%）であった。以下、フォロー対象者をフォロー群、フォロー非対象者を非フォロー群とする。A 1（過活動性）は両群同数であった。A 2（過緊張性）も両群同数であった。B（養育ストレス）はフォロー群が 1 ポイント多かった。C（保護者ストレス）は非フォロー群が 6 ポイント多かった。D（環境ストレス）はフォロー群が 3 ポイント多かった。R（拒否）はフォロー群が 3 ポイント多かった。アンケート質問項目全 31 項目のうちフォロー群は平均 6.9 点、非フォロー群は平均 3.5 点であった。非フォロー群に比しフォロー群は今回の質問項目に約 3 項目多くチェックしていることになる。

今回の結果では、フォロー群はアンケート項目をより多くチェックしている結果となった。また個別の質問項目別に割合もフォロー群がより多くチェックしていた。しかし、C（保護者ストレス）に関しては非フォロー群が高い結果となった。

個別の質問の結果からは次のような特徴が見出せた。Q 11「子育てを背負わされているように感じる」は非フォロー群 1%に対しフォロー群は 11%、Q 23「子育てを手伝ってくれる人が身近にいない」は非フォロー群の倍以上の数がフォロー群でチェックされている。また、Q 30「健診で子どもが普段の力を出してくれるか心配である」も非フォロー群の倍以上の数がフォロー群でチェックされている。また、Q 14「子育てに関して困っていることはない」Q 16「自分の子どもを他の子どもと比較しても意味があるとは思えない」Q 20「子どもの成長は順調である」はフォロー群のほうがより多くチェックしている。

4-5 健診受診後質問紙の結果

図 33 は健診受診後質問紙の結果を表した図である。

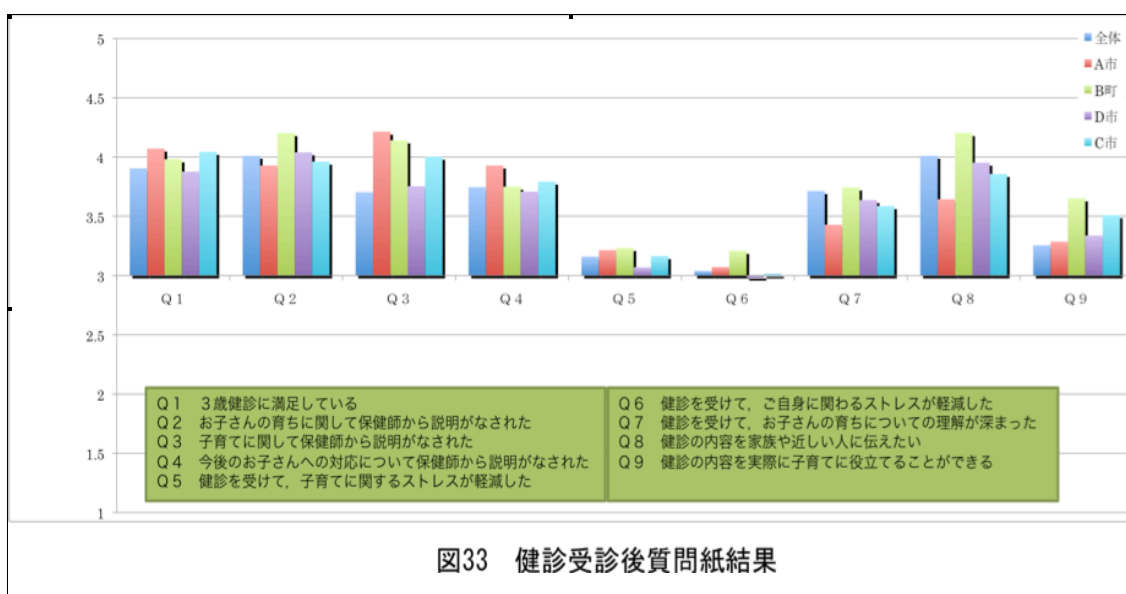


図 34 は 3 点を基準の点としたグラフである。点が高ければ高いほど満足度が高いことになる。結果はどの都市も似たような傾向になり、Q 5、Q 6 が他の設問と比べて点が低くなった。Q 5 と Q 6 はともに保護者自身のストレスの軽減に関する質問である。このことは健診において子どもに関する対応にはある程度満足がいつているが、保護者自身のメンタルヘルスに関しては必ずしも満足度が高くないことを示していると言えるだろう。これは本調査が目的としている、健診における保護者へのサポートが必ずしも十分ではない、という仮説を支持しているといえるだろう。

4-6 考察

これらの結果から調査全体としては以下のことが示唆されるだろう。

A 1 の子どもの過活動に関わる項目に関しては、フォロー群が多くチェックしている傾向にある。これは過活動傾向が保護者や保健師にとってわかりやすいストレス項目であり、健診にて支援を受けるやすい傾向があることを示すと考えられる。

A 2 の子どもの過緊張に関わる項目に関しては、非フォロー群が多くチェックしている傾向にある。これは過活動傾向とは逆に、過緊張傾向が表に現れにくいストレス項目であり、健診にて支援を受けにくいことを示している。

B の保護者自身のストレス項目に関しては、フォロー群が多くチェックしている傾向にある。これはフォローを受けている保護者のストレスが高いことを示しており、健診にてフォローを受ける場合には保護者のストレスに対するケアが必要であることを示唆している。しかし都市の規模が小さい B 町は逆に非フォロー群の方が高くなっている。これは規模の大小によってはフォロー群の保護者へのストレスケアが十分行われていることを示す結果とも考えられる。

C の子育てに関わるストレスの項目、R の健診への負担感や拒否感の項目は、都市によってどちらの群が多くチェックしているかが異なっている。これはその都市の特徴、健診の細かいスタイルや事前に使用する問診票などの違いといったことがこれらの項目に影響していると推察される。C と R に関してはさらなる調査検討が必要だろう。

D の環境から生じるストレスの項目はフォロー群が多くチェックしている傾向にある。これはフォローを受けている保護者は、外部環境のストレスに対して十分に支援されていない可能性があることを示している。

5. 今後の課題

今回の調査から、健診でフォローされる保護者には保護者自身のストレスや子育て環境へのストレスが高いこと、また逆に健診では子どもの過緊張傾向への支援が行われにくい

可能性があること、非フォロー群にも養育ストレスという観点から見ると支援が必要である保護者がいる可能性があること、現状の健診では必ずしも保護者自身のストレスが軽減したと感じられないこと、が明らかとなった。今後はさらに調査数を増やし、これらの可能性をより詳細な調査と分析にて検証していく必要があるだろう。また今後ストレスチェックシートを完成させるには、質問項目の精査、すでに支援を受けている保護者のストレス傾向を把握すること、都市ごとの特色や健診のスタイル、保健師の方針などを質問紙に反映させることができるようにすること、といった点を改善する必要もあるだろう。

またこのストレスチェックシート共に、チェックシートの使用方法、ストレスの高い保護者への支援の方法、複数の機関の連携をとる方法、などについて説明したマニュアルが必要となるだろう。これはこうした健診に使用するツールは、支援の必要な保護者を捜し出すだけでなくその後の支援の方法まで明示していなくては、いたずらに保護者の不安を増大させることになりかねないからである。

終わりに

調査にご協力いただいた保護者の皆様、各自治体の健診スタッフの皆様に厚くお礼申し上げます。また今回の調査を支えてくださった、北海道保健福祉部福祉局障害者保健福祉課就労支援グループの高橋さんにも厚くお礼申し上げます。

これから3歳児健診を受けられるかたへの調査協力をお願い

この調査は、北海道庁から補助金を得て、子育てに伴う「親」の支援について検討しているものです。

健診を利用してお子様の様子を把握することで、保護者の子育ての負担に気がつき、早い段階で支援ができないだろうかと考えています。

そのため3歳児健診を受けたかたを対象に健診の感想について、あてはまる項目をチェックしていただければと思います。

これらの結果は今後の子育て支援の改善などに役立てたいと考えております。質問は全部記入するのに、おおよそ五分から十分程度かかります。結果は単純に数字で処理をし、調査票については責任を持って処分させていただきます。もちろん、調査に協力いただいた個人の回答のみを問題にしたり、公表したりすることはいたしません。

今後のよりよい健診のために、ご協力いただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

ご不明な点などがありましたら、研究者代表の田中までご連絡ください。

研究者代表

田中康雄（北海道大学大学院教育学研究院 附属子ども発達臨床研究センター）

連絡先

電話/FAX : 011-706-3290（代表）

アンケートの記入に同意・ご協力いただける方は下の欄に署名をお願いします

保護者の方の署名_____

また確認のためにお子様のお名前もお願いします。

お子様のお名前_____

—————ここから下が質問になります—————

今現在のお子様の状況についてお尋ねします。該当する項目にマルをご記入してください。

マル記入欄	
	幼児期、おとなしかった
	気が散りやすくひとつの遊びに集中できない
	知らない人やもの、場所になかなか慣れず時間がかかる
	意味がわからない音や叫び声をだしたりする
	ちろちろしている
	人の話が聞けない
	人がそのもので遊んでいても、目にはいったものだけにとらわれてしまい、つい奪い取ってしまうことがある
	遊びなどの場面で、自分の順番がなかなか待てない
	初めての人に弱い
	不器用である

裏へ続きます

次に子育ての状況についてお尋ねします。該当する項目にマルをご記入してください。

	子育てを背負わされていると感じる
	地域の中で暮らしにくい面があり、子育てに不安を抱えている
	子育てを行う上で、経済的に苦しい
	子育てに関して困っていることはない
	今日の健診で、子どものことをきちんと見てもらえるか心配である
	自分の子どもと他の子どもを比較しても意味があるとは思えない
	子育ては自分1人でできている
	今日の健診には特に期待していない
	子育てに時間をとられ、自由な時間がない
	子どもの成長は順調である
	今日の健診で、子どもについて何か言われるのではないかと不安である
	育児のことについて人から言われる必要はないと思う
	子育てを手伝ってくれる人が身近にいない
	今日の健診のために、家庭で何か特別な取り組みを行ってきた
	他の子の成長と比べてしまう
	経済面、地域生活、家族のことを相談できる場所や専門家にどういったものがあるかわからない

	子どもや子育てについて気になる点を聞いてみたい
	子どもの成長に不安がある
	子育てについての悩みを相談する相手がいない
	今日の健診で子どもが普段の力を出してくれるか心配である
	今日の健診で、子育てについて何か言われるのではないかと不安である

また、お子様を育てる上で、心配なことや、気がかりなことがありましたら、下の欄にご記入ください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

スタッフ記入欄

3歳児健診を受けられたかたへの調査協力をお願い

この調査は、北海道庁から補助金を得て、子育てに伴う「親」の支援について検討しているものです。

健診を利用してお子様の様子を把握することで、保護者の子育ての負担に気がつき、早い段階で支援ができないだろうかと考えています。

そのため3歳児健診を受けたかたを対象に健診の感想について、あてはまる項目をチェックしていただければと思います。

これらの結果は今後の子育て支援の改善などに役立てたいと考えております。質問は全部記入するのに、おおよそ五分から十分程度かかります。結果は単純に数字で処理をし、調査票については責任を持って処分させていただきます。もちろん、調査に協力いただいた個人の回答のみを問題にしたり、公表したりすることはいたしません。

今後のよりよい健診のために、ご協力いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

ご不明な点などがありましたら、研究者代表の田中までご連絡ください。

研究者代表

田中康雄（北海道大学大学院教育学研究院 附属子ども発達臨床研究センター）

連絡先

電話／FAX：011-706-3290（代表）

今日の健診を受けての感想を、記入例にならって、5つの選択肢の中から選んでください。

<記入例>

例えば、「1万円は貴重である」という質問に「とてもそうだ」と答えたい場合には、下のように答えます

1万円は貴重である	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							

ここからが質問です。5つの選択肢の中で、自分の気持ちに一番近いものを選んでください。

3歳健診に満足している	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							
お子さんの育ちに関して保健師から説明がなされた	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							
子育てに関して保健師から説明がなされた	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							
今後のお子さんへの対応について保健師から説明がなされた	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							
健診を受けて、子育てに関するストレスが軽減した	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							
健診を受けて、ご自身に関わるストレスが軽減した	<table border="0" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">とても そうだ</td> <td style="text-align: center;">そうだ</td> <td style="text-align: center;">どちらでも ない</td> <td style="text-align: center;">そうではない</td> <td style="text-align: center;">全然そうで はない</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない					
とても そうだ	そうだ	どちらでも ない	そうではない	全然そうで はない							

次のページへ続く

健診を受けて、お子さんの育ちについての理解が深まった	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">とてもそうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">どちらでもない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうではない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">全然そうではない</td> </tr> <tr> <td colspan="5" style="text-align: center;">└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘</td> </tr> </table>	とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない	└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘				
とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない							
└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘											
健診の内容を家族や近しい人に伝えたい	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">とてもそうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">どちらでもない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうではない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">全然そうではない</td> </tr> <tr> <td colspan="5" style="text-align: center;">└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘</td> </tr> </table>	とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない	└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘				
とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない							
└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘											
健診の内容を実際に子育てに役立てるのは難しいと思う	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">とてもそうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうだ</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">どちらでもない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">そうではない</td> <td style="width: 20%; text-align: center;">全然そうではない</td> </tr> <tr> <td colspan="5" style="text-align: center;">└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘</td> </tr> </table>	とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない	└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘				
とてもそうだ	そうだ	どちらでもない	そうではない	全然そうではない							
└──────────┴──────────┴──────────┴──────────┴──────────┘											

以下の欄には、今日の健診に関して、感想や要望を自由にお書き下さい

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。この用紙は返信用封筒に入れてポストに投函していただきますようお願いいたします（送料はかかりません）